

911.304

911. 304-Ta315

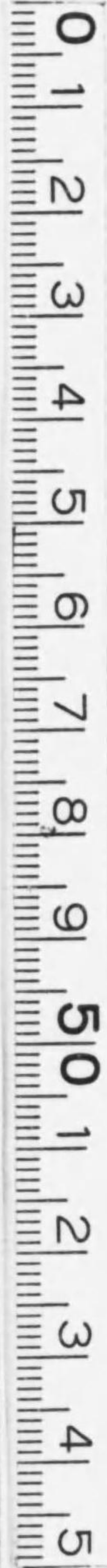


1200500755948

31

後

集



始





450





911.304

TA31

# 俳談

虛子著





## 序

他人と座談をして居つた場合、又質問にあつた場合などに話したことを集めて見たのである。俳談、雑談の集録である。

何故に何といふ理窟を述べることはさけて、只何々であるといふ断定した意見だけを述べたといふやうなものである。善解する人は善解してくれるであらうと思ふ。

昭和十八年二月二十日

丸ノ内ホテル六二三號室に於いて

高濱 虚子



979  
79

# 俳談 目次

秋霜烈日の批判.....	一
堂々歩武を進めてゐる.....	三
本ものの虚子で推し通す.....	四
芋 錢 畫 伯.....	八
鳴 雪 翁.....	一〇
「虚子句集」.....	一六
萬 葉 調.....	一九
作家を導く.....	二〇
操つてゐた糸が切れる.....	二二
作 と 批 評.....	二三
俳句の翻譯.....	二三
山會(文章會)について.....	二五



一方の旗頭……………	二七
「写生」を目標に……………	二八
京都風と江戸風……………	二九
鐘に撞木が當るやうなもの……………	三一
西洋人に俳句の趣味は判らぬか……………	三一
波瀾重疊とも見える……………	三三
雑詠豫選……………	三四
歳時記……………	三七
素人・玄人……………	三九
自然の儘の公園……………	四〇
質問の針にかけて……………	四一
書き留めて置き度い……………	四二
句を作る時のさま……………	四三
中川四明、草間時福……………	四四
花野……………	四五

昔話……………	四六
私の東京に出た時分……………	四九
鴨外……………	五〇
子規の話……………	五一
私の句日記……………	五七
ホトトギスの弱味が強味……………	五八
前書つきの句……………	六二
俳句に就いての實驗談……………	六三
乙字……………	六四
連句に勝れてゐるのは芭蕉……………	六六
季題……………	六六
どの時代も貴い……………	六七
流行……………	六八
弟子に導かれる……………	六九
周圍に驚かさねぬ……………	六九



片つぼづけて議論をするのはいけぬ	七〇
さびしをり	七一
新しき	七二
一生一句風	七三
天分と修業	七四
拙なるが如く	七五
月並	七六
子供に自然の美を教へる	七七
島村元	七八
修業時代の長いのは仕合せ	七九
女流作家	八一
題の好き嫌ひ	八二
新題	八三
雑詠	八三
選句	八五

自分の主観を働かせすぎる	八六
國民新聞社にゐた	八七
新月並	八九
師弟關係	九〇
俳句が他の文藝の眞似をするのはいけない	九〇
奥に漂ふてゐるもの	九一
俳句の質問に答へなかつた	九二
昔の吟行と句會	九三
句の道	九五
花鳥諷詠	九六
技巧といふこと	九七
不幸といふこと	九八
口授	九九
酒	一〇〇
晩年の思ひ出に長いもの	一〇一



後 繼 者.....	101
正しいか正しくないか.....	101
主観は貴といが客観の修業が第一.....	101
子規の「俳句分類」.....	102
大 龍 寺.....	102
高 野 山.....	102
滅びるものは滅びるに任す.....	110
「ホトトギス」.....	111
子 規 の 句.....	111
俳句は昔も今も盛.....	113
「寫生文集」.....	114
坂・本四方太.....	115
狂 言.....	116
慶 弔 の 句.....	117
人後に落ちない積り.....	117

壯 士 芝 居.....	113
心持が滲み出て来る.....	114
信 仰 し ろ.....	115
何ぞ大志無きや.....	117
俳句はもとより詩である.....	119
「俳諧須菩提經」.....	121
類 句.....	123
洋行をするかせぬか.....	123
天明時代の句.....	127
守 舊 派.....	126
自然主義の影響.....	129
不易の方に重きを置く.....	132
破綻はそこから来る.....	133
滿 洲.....	134
脚 本.....	134



雑詠は道場……………	一四七
俳話のレコード……………	一五〇
都 會 美……………	一五一
表 現……………	一五四
明月前川に滿つ……………	一五六
ブラジルの新聞……………	一五七
國際歳時記……………	一五八
俳句の映畫化……………	一六二
俳句の講演や放送……………	一六二
子 規 寸 話……………	一六三
新作脚本「髪を結ふ一茶」……………	一六四
自分の道を進むこと……………	一七一
俳句でなければ言へないもの……………	一七二
入門は易く上堂は難し……………	一七四
平凡でも大衆的でない……………	一七五

大衆化したといふこと……………	一七七
ホトトギスの繪……………	一七九
寫生文の影響……………	一八一
田 岡 嶺 雲……………	一八二
たとへばブラジル・臺灣の句……………	一八二
個性は自然に出る……………	一八四
東洋的審美學……………	一八五
ホトトギスに養はれたものだ……………	一八五
茶……………	一八六
能……………	一八八
弟子を養ふこと……………	一八九
稚拙の面白味……………	一九〇
俳句といふ語……………	一九一
新興俳句といふ言葉……………	一九四
川 柳……………	一九五



臺灣の季題	一九六
ハイカイ詩人達	一九六
外國と俳句	一九八
此頃の月並宗匠の句	一九九
ポーカンス氏等	一九九
ハイカイ詩人に季を教へる	二〇三
向ふにゐる俳人	二〇五
松瀬青々	二〇七
胸像	二一〇
佐渡の旅	二一三
連句も季題の文藝	二一五
俳諧詩	二一八
寫生文	二一九
「新歳時記」	二二四
句帳	二三三

秘傳	二三七
上ノ畑楠窓	二三六
連句は人生を寫す	二三一
吟行と季題	二三三
秋田地方	二三三
連句の研究は私の生涯に残された重荷の一つ	二三四



### 秋霜烈日の批判

昔の俳句が月竝になつたのは、無學な連中に弄ばれたといふこともありませうけれど、一方には大名とか、金持とかの間に行はれたといふことにも原因してゐると思ふのです。吾々の新俳句が起つた當時は、俳句を作る者は皆書生であつたのですが、近來俳句が盛んになるにつれて、各階級に俳句を作る人が殖えて來た。これは一方からいふと慶賀すべきことのやうでもあり、又一方からは多少警戒を要すべき現象のやうにも思はれる。昔の俳句が月竝に陥つたのと同じ徑路を取りはしないか、と杞憂を抱くのである。

我等が書生時代に俳句を作つて、下宿の二階で火鉢を圍んで運座をやるとか、若しくは郊外の茶店で、その日一日郊外を散歩して作つた句を批評し合ふ、といふやうな時代から、だんだんと年を経て、殊にこの四五年來の俳句會に臨んで見ると、今昔の感に堪へないやうな次第である。三十年前を追想して見ると、全く世界が變つたやうな状態である。それも子供が成長し



て大人になつたのである。當時二十餘歳の書生であつたのが、今日五十幾歳の老人になつたのである。相當の待遇を受けることにも、別に不思議は無いではないか、ともいへるが多少氣になる。殊にこの三四年は、俳句が社會的地位ある人々の間に行はれることが顯著になつて來た。そこでかういふ時分に際會して、自分の立場をどう考へたらよいのか。

答へは簡單であるやうに思ふ。權門富豪の徒であつても、その作る俳句が立派な句であれば採る。又熊公八公の徒であつても、その作る俳句が立派な俳句であれば採る。併しながら其作る句が詰まらぬ句であれば採らぬ。といふこれだけの信條がありさへすれば、俳句界は健全である。併しこゝを踏み誤つて、權門富豪の徒の句は、少々まづくつても之を歓迎する。かゝる傾向が見えて來たならば、もう墮落の第一歩を踏み出したのである。この點は私自身も大に意を致すが、又世の先覺者を以て任ずる諸君も、大に意を致す必要があらうと考へる。何も芭蕉の一蓑一笠を學べといふのではない。併しながら作物の是非に對しては、秋霜烈日の批判を加へるといふ考が無ければならぬ。

(大正十五年一月)

### 堂々歩武を進めてゐる

子規居士生存中の俳壇は立派なものであつたが、今日の俳壇は墮落してゐる、といふ説に就て一言して置きたい。私の知つて居る子規居士生存中の俳句界といふものも、今日の俳句界と別に變らない。今日の俳句界は子規居士生存中から見ると、數千倍、數萬倍の廣さになつてゐる。従つて種々雑多のものを集めてをることは勿論だが、少くとも中堅になつてゐる少數の昔の人に比べて、まさるとも劣らぬ藝術的良心を持つてゐることは斷言する。いつの世でも眞摯の態度を缺くものは必ずあるのである。芭蕉の生存時代にもあり、蕪村の生存時代にもあつたことゝ考へる。局外に居る人から見ると、それらの方面のみが目につくかもしれぬが、併し私たち局内にあるものから見ると、堂々歩武を進めてゐる少數の方が目につく。

(大正十五年三月)



### 本もの、虚子で推し通す

過去の俳句界の大勢を述べるといふことは、私はその中に没頭してゐる爲に、甚だむつかしい。それは是非局外に在る人に俟たなければならぬ。私は自ら接觸した、ほんの断片的の事柄を述べて見よう。

先づ子規居士歿後二三年の俳壇に就て云へば、作者は居士生前より引續いて、だん／＼殖えこそすれ、減るといふやうなことは無かつた。が、その後しばらくして碧梧桐君の所謂新傾向運動といふものが起つて來た。私はそれより前、俳句のことは之を碧梧桐君に托した積りでゐた。私は俳句を作らないといふのではないが、俳句界のことは碧梧桐君に托する。さうして私は専ら寫生文の方面に努力して見ようと思ひ立つて、及ばずながら努力して見た。さうして三年の月日が経過したのである。そのうち私は健康を損じた。さうして鎌倉の家に靜臥して、文章を作ること出来なくなつて來た。その間碧梧桐君の新傾向運動はなかく盛んであつ

て、句を作つてをる俳人は、悉くその説を聞いて馳せ參するといふ状態であつた。子規門下の元老と云はれる人達も、勢ひ碧梧桐君の主張に感化せられたといふ状態であつた。私は病牀に在つてその状態を見て甚だ偏つた方向に進んでゐることに氣がついた。さうして病を養つてゐる傍ら、少數の人と共に又俳句を作つて、それをホトトギス誌上に發表した。その發表が動機となつて、今まで碧梧桐君の新傾向に反對であつて、ひそかに不平を抱いて居つた人達が、一時に立つて私の作る句に共鳴するやうになつた。それ等の人々は俳壇の爲に私をもとの道に引戻さうとするのであつた。私も健康が小説を書くのに不適當であつたが爲に、又々俳句の方面に従事するやうになつた。それから徐々と勢力を増して今日に至つてゐるものである。

元來私は俳勢擴張といふやうな擴張運動を試みたことはないのである。私はすべて消極主義である爲に、私たち仲間の俳句といふものを宣傳して、これを擴張しようとしたことは殆ど無いと云つていい。たゞ嘗ても云つたやうに、「來る者は拒まず、去る者は追はず」といふ主義であつて、何人でも私の主張に従つて參加して來る人は之を歡び迎へるし、又私の許を去らうといふ人は敢て之を拒まぬのである。ホトトギスの賣行といふことについても、宣傳といふこ



とはせず、たゞ購讀を希望する人があればそれに應ずるのみである。併しながら徐々と俳人の數を増し、又ホトトギスの讀者の數を増し、それ以來二十年ばかりの月日の間に、社會の各階級の人の間に行はれるやうになつた。併しホトトギスの賣行でも、子規居士時代の賣行と、今日の賣行とはそれほど驚くべき相違のあるわけではない。之を一般の雜誌界から見たら、依然として極めて少數である。

子規居士は日蓮を愛してゐて、日蓮が自分の宗旨を擴めるといふこと、竝にその方法に頗る感銘して男子として自分の主張を立て、且つ之を鼓吹するのは、斯の如くなければならぬ、といふことをよく話して居つた。即ち日蓮の「念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊」といふが如く、自分の宗旨以外は悉く非である、といふが如く、自分以外の何ものをも、懾伏せしめねば已まぬ概があつた。月竝に對する論鋒は勿論のこと、歌壇に對する論鋒の如き、辛辣を極めたと云つてもいい。「歌よみに與ふる書」十篇の如き、「鐵幹是なれば子規非なり、子規是なれば鐵幹非なり」といふが如き、自説を高唱して少しも假借しなかつた態度は、頗る男らしかつた。今の俳壇を如何に教育すべきか、如何に指導すべきかといふことを考へて行く時に、ふとこの

子規居士の態度に思ひ到つて、次に自分自身の態度を振返つて見て、多少の感慨が無いでもない。併しながら私は自分の本來の性質に違つたことをするのは好まぬ。即ち自分の性格相當のことをする。そこで私は「念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊」と口には唱へない、のみならず念佛宗や禪宗の輩からお前の宗旨は駄目だよ、と切り込まれて來ても、敢て抵抗しない。自分は自分の固く信ずるところがあり、この信仰は何人もどうすることも出来ないものである。他の刀が切つても切ることには出來ぬ、他人の舌が干轉してもどうすることも出來ぬものである、といふことを固く信じてゐる。從來俳壇に在つて、私ほど多くの人々から攻撃されたものも少いであらうと思ふ。これはホトトギスをはじめた時分から今日に至るまで、入替り立替り何等か毒舌を弄する人が出て來る。これは私の不徳の致すところであるが、私はそれに對して少しも手出しはしない。殆ど顧みない。それは必ずしも私が卑怯であるから、といふわけでもないやうに思ふ。それらの毒舌がどれほどの働きをするかといふことを、大概知つてゐるからである。自分の俳句は、少しもそれらの言葉に累せらるゝことなしに、著々として歩を進めてゐるといふことを、固く信じてゐるのである。



佛壇の教育といふことに就ても、敢て破邪顯正の劍を振かざしはしないけれど、自分の精神、自分の操守、自分の好尚といふものは、固く守つて何等他の妨害によつて破壊さるゝことはな  
5。

私は芭蕉の眞似、子規の眞似はしない。どこまでも虚子で推し通す。古往今來唯一人である  
虚子で推し通す。にせものゝ芭蕉や子規にはならず、本ものの虚子で推し通す。

(大正十五年五月)

### 芋 錢 畫 伯

私は妖怪の話が出ると、一番に小川芋錢君を思ひ出すのである。芋錢君は牛久沼のほとりに  
住んで居つて、實際河童が行列をして牛久沼のほとりを練り歩くのを見たと言つてゐる。又二  
人で牛久沼のほとりを歩きながら、芋錢君は私にこんな話をしたことがある。それは里人が非  
常に老齡に達した木を切つた話で、大勢里人が寄つてたかつて、或は綱を引張つたり、梯子を

かけたりなどして、或老樹の枝をおろしたことがある。さうすると、その木が大變にふるへ  
て、その切りおろされた枝の切口から、眞赤な血が流れ出たといふことを、芋錢君は極めて眞  
劍に、眞面目に話した。その芋錢君の話を聞いて居る瞬間は、私もその氣になつて、やはり老  
樹の枝がふるへて、その切口から赤い血潮が迸り出た如く感じたのである。少しもそれを荒唐  
無稽なことゝして笑つてしまふ氣分にはなれなかつた。芋錢君はさういふ人である。牛久沼の  
うす暗い水の腐つたやうな沼のほとりに子供の時から生ひ立つて、今殆ど六十歳に近い年齢ま  
でもそこに住んでゐて、牛久沼の怪、老樹の精靈といふやうなものを固く信じてゐる。それで  
芋錢君は好んで河童の畫をかいいたり、又水の精とか、木の精とかいふものをかいいたり、又嘗て  
ホトトギスの裏畫にかいた「豆腐なめ」といふづべらんの坊主が赤い舌を出して豆腐をなめて  
ゐる畫をかいいたりする。私の知人のうちで最も妖怪趣味を解してゐるものは、恐らく芋錢君で  
あらうと思ふ。

(大正十五年八月)



明治二十三年であつたか、碧梧桐君が東京に一高の試験を受けるといつて出て来て居つた時分に、私は碧梧桐君に手紙をやつて子規居士に紹介してもらつた。中學校を卒業する一年前位から私は文學に志さうと決心して、その頃創刊された森鷗外の「しがらみ草紙」、坪内逍遙の「早稲田文學」などを愛讀して居つたので、同じく大學にあつて文學を専攻してゐる同郷の先輩として子規居士に紹介を乞ふたのである。これより前碧梧桐君は既に中學に居る時分に、「七部集大鏡」などを日向ぼこりしながら讀んでゐて、

ほとゝぎす 鳴くや 雲雀の 十文字

といふ句などを面白いと言つてゐた様に記憶する。私はさつぱり其の句の意味をすら解することが出来なかつた。さうして私は近松や西鶴などを愛讀してゐたのである。まだ俳句なるもの味ひを解さうとも試みなかつた。子規居士に紹介してもらつたのも、單に文學の先輩として

であつて、俳句の教を乞ふといふ考は毛頭なかつたのである。

然し碧梧桐君が手紙の端に俳句を書いてきて子規居士に見てもらつたことを報知して來たりなどした爲めに、私も作る氣になつて若干作つて子規居士の許まで送つた。子規居士はそれを丁寧に直してくれた。それから明治二十四年の夏休に子規居士が歸省した。その時居士の口から東京の俳句仲間の噂などを聞いて、飄亭、非風、明庵(宰州)、古白君などの話も出た様に記憶して居る。自然鳴雪翁の話も出たことと思ふが明らかに記憶には止まつて居らぬ。

明治二十五年の九月にはじめて京都の高等學校に入つた。その秋に子規居士が日本新聞に這入つて郷里に母堂などを迎へに行く序でに京都に立寄つて、そして居士は親しく私の下宿を訪れた。それから二人で嵐山に遊んだ。この時も二里ばかりの道を歩いてゆく途中盛に文學論をたゞかはしたが、あまり俳句の話はしなかつた様に思ふ。しかしその翌年の明治二十六年の春休みに私は徒歩旅行をして東京へひとりで出かけた。もとより東京の空に憧れて一度は行つて見たいと思つてゐたからであつた。その時子規居士の家ではじめて鳴雪翁に會つた。今の子規庵とはちがつて、今の家よりも二三軒西の家であつた。その時は私が上京して來たといふ爲め



に小會が催されたのであつて、七八人の會合であつたかと思ふが、鳴雪翁のほか伊藤松宇君位を記憶してゐるばかりで、誰々の會合であつたかをはつきり記憶せぬ。たしか桃雨、得中の諸君があつたかと思ふ。松宇、桃雨、得中の諸君は、「椎の友」といふ社中の人々であつてその人達には前年から子規居士は心安くなつてゐて、はじめて袋廻しの運座といふ方法を教はつてゐた。その時もその袋廻しの運座であつた。私はたゞ一心に句作したのみの記憶であつて鳴雪翁がどんな話をされたか、さういふ記憶は少しもない。

次には、京都の虚桐庵と稱へて居つた學校前の下宿に、飄亭君、つゞいて鳴雪翁の來られたことがあつた。この時の翁の記憶もやはり私にはつきりして居らん。たゞ當時私達は八疊の座敷に碧梧桐君と二人下宿して、二階の八疊やその他の間には他の下宿人が居るにかゝらず、自ら虚桐庵と稱へて、二人でその下宿を占領した様な氣持で居ただけは事實だ。四五の同級生と同覽雜誌を作つたり、又俳句をすゝめて作らせたなりなどしてゐた。

私が鳴雪翁と最も親しく往來をして、楽しい記憶が残つてゐるのは、明治二十八九年の頃、仙臺の高等學校をやめて、東京に在住した二三年であつたと思ふ。その頃私は暇があるとよく

翁と共に、東京の近郊を歩るいたもので、私と翁とたゞ二人ばかりのこともあつた。又三四人連れのこともあつた。翁は必ず日和下駄を穿かれて極めて大股に早足で歩かれた。翁は東京の近郊の地理に詳しいので、いつでも私の先に立つて行かれた。私は頗る地理に疎く、又記憶が悪いので、たゞ翁について歩くばかりで、二三度行つたことがある所でも、その度々に新たになつた。これは今でもさうである。人の家を訪ねる場合などでも、どこで電車を下りてどう行けばいゝといふ事など、其都度人に聞くやうな次第である。そんな譯であるからたゞ野中道をすた／＼歩くばかりで、どこを通つて、どこに出たのか少しも頭に残らなかつた。然し鳴雪翁は百草の松蓮寺に出るには此處に近道がある筈だがなどと、極めて小さい近道でも御存知であつた。さうして常に私達の先に立つて威勢よく歩かれるのであつた。がしかし其野中道の何處でもかまはず急に立ち止られたと思ふと手にして居られた手帳をひろげて、筆を持つたやうに鉛筆を持つて、それに句を書きとめられるのであつた。その頃の翁は一句を成すのに非常に苦心されたやうである。翁は野道を歩いて實際の景色を寫生されるのであつたが、然しその頃は寫生といつても此の頃の寫生句とは餘程違つたものであつて、自然からヒントは得るものゝ、



面白いと思はれる景色を頭の中で構成するやうな傾があつた。翁はあゝでもないかうでもない  
と様々に工夫を凝らし、その一句を成すまでには餘程の時間を費されたらしい。然し中には又  
無雑作に出来ることもあつたのであらう、矢繼早に又鉛筆をなめて手帳に認められて居るのを  
見ることもあつた。晝飯は野中の婆の茶店で芋や蒟蒻の煮たのを菜にして食つた。鳴雪翁はこ  
の蒟蒻の煮ゑなどで御飯をたべることに餘程興味を持つて居られた。私も亦相當に興味をもつ  
てゐた。それからその茶店の框に腰をかけながら、暫く休んで、又一二句を手帳に認めたりな  
どして、それから其茶店を出て、又野道を歩いて東京に歸るのは大概日暮であつた。早や燈火  
のついてゐる東京の町を歩きながら、牛肉屋に寄つて夕飯を食つた事もある様に記憶してゐ  
る。その女中に紙と硯とを命じて一日の收穫の句を各々その半紙にうつし、それを互に句の  
上に○を付けたり批評したりするのであつた。此頃は翁が最も句作に熱心な時代ではなかつた  
かと思ふ。

穴八幡の横の坂を登つて、畑道を戸塚の方へ五六町行つた所にあつたといふ、古白君の、以  
前居つた下宿のあとに、私は下宿した事がある。これは坪内さんのシエクスピーアの講義が聞

きたいために、私はしばらく早稻田専門學校の文科に籍を置いてゐた事があつた。古白君の居  
つた所であるといふ事が一種のなつかしみを覚えて、私はそこへ移つたのであつた。嘗て古白  
君が此處に居つた時分に鳴雪、飄亭、肋骨諸君は會合したことがあるとのことであつたが、私  
が其處へ移つてからも一度俳句會を催して鳴雪翁なども來會された事がある。鳴雪翁とその下  
宿の老婆とが古白の噂などをした。その老婆といふのは鐵漿をつけた赤ら顔の、すこし痘痕  
があつたかと思ふ、その頃五十あまりの女であつた。其の老婆も聲の高い女であつた。その老  
婆と、おなじく聲の高い鳴雪翁とが話せられるのはかなり騒々しく句作の席上に響き渡つた。  
その老婆は鳴雪翁が見えるといふので、特に田樂をこしらへて振舞つた様に記憶してゐる。

鳴雪翁は一年ばかり俳句をやめて居られた事がある。俳句を作らないばかりでなく、俳句の  
普信等もことはつて居られた事がある。それは明治三十年前後であつたやうに思ふ。三十一年  
の十月にはホトトギスを松山から東京に移して私とその衝に當るといふ事になつたが、其の東  
京で出したホトトギスの初めの號には、鳴雪翁の祝辭などが載つてゐるから此頃は止めて居ら  
れなかつたかも知れない。が、はじめは鳴雪翁はホトトギスには關係が薄かつたやうに思ふ。



併し間もなく鳴雪翁、下村爲山、福田把栗の諸君と一しよに九品佛に詣つて私は其の紀行をホトトギスに載せたことなどもある。

(大正十四年三月)

### 「虚子句集」

自分の句を撰抜するといふことは中々むづかしいことである。古人が自ら句集を作らないといふのも道理あることと思ふ。それはひとり謙虚な心持で出さないといふばかりではないと思ふ。自分の句を選むことが種々な點でむづかしいといふことも一つの原因であらうと思ふ。第一、選むとなるとこれもいかん、あれもいかんとなつてしまつて、剩す所は僅少のものとなつてしまふ。その僅少のものも尙ほ嚴密に吟味してゆくと、更にあきたらぬふしが出て来て、遂に全部抹殺してしまふやうなことになる。句集を出すよりも寧ろ出さぬ方が満足だといふ心持になる。それでまた、これではいかぬからもう少し寛大に採らうと思ふと、大概な句に未練が

あつて、今度は抹殺するのがむづかしい事になつてしまふ。此句はかゝる思ひ出のある句である、といふやうな感じさへ付き纏つて、中々切り捨てるのがむづかしい。先づいゝ加減に取りはからうて置かうといふのが落ちである。今度の虚子句集も、實はそのやうな鹽梅で出来あがつたのである。脱漏した句が澤山あるではないか、殊に脱漏した句にいゝ句があるではないかと言はるれば、成る程さういふ心持もする。又収録した句の中に随分缺點のある句があるではないかと言はるれば、又さういふ心持がしないではない。然し自分が取捨した時の心持は、兎に角或感じがあつて取捨したのである。これが他人の句であつて見ると、一刀兩斷に何の未練氣もなく判別がつく。その力の冴えが自分の句になると鈍るのである。

子規は「芭蕉の偉いのは範圍の大きなことであつて、芭蕉の弟子がそれ〴〵長所を持つてゐる、然しその長所は悉く芭蕉の具へて居つた所である。芭蕉は駄句も随分多い。たゞ此點に於て偉大なりと言はねばならぬ。」といふことを言つて居つた。而してまた子規自身もいくらか芭蕉の長所を自分自身に求めて居つたやうな傾きがある。俳句の十體といふやうなものを作つたり、又去來調、其角調、蕪村調といつたやうなものを作つたり、甚しきに至ると、これは鳴雪



調であるとか、これは碧梧桐調であるとか、これは虚子調であるとか、自分の後輩のものゝ調子まで真似て作つて居つた。これは子規の長所でもあり、また短所とも言ふべきものである。第一その模倣調は少しもその作家の調に似てはゐなかつた。今から見ると全く遊戯としか思へぬ程度のものである。然しその結果如何はとりのけて、子規の考がどういふ點に在つたかといふことは推量が出来ぬ。然し私は子規の真似をしようとは思はない。又真似をしようと思つた所で出来るだけの才能の持ち合せがない。私はたゞ自分の句を作るばかりである。何人の長所にも眼を呉れない。たゞ自分自身の狭い境涯に安んじて句を作つて居るのである。雑詠を選むときは之に反して、諸君各々の長所を出来るだけ認め、又違つた方向に進むことを無上の樂しみとしてゐるのである。たゞ自分で句作する場合は、雑詠の多趣多様なることなどは、全く念頭にない。今まで廣い世界に居たものが、急に狭い天地に戻つて来て、そこには何人もない、たゞ虚子一個があるばかりである。だから私の句は、單調に私一個の道を歩いて来てゐるばかりであつて、何等他の大勢力も之に影響を與へるといふことはない。

(昭和三年十一月)

## 萬葉調

萬葉調、萬葉調といふことが二、三年來私の耳に聞こえるが、私はたゞ萬葉の言葉を借りて來たといふものを二、三散見した位の記憶しかない。然しそれが萬葉調と呼ばれ得るかどうか。萬葉調などと言つて騒ぐには當らないと思ふ。萬葉調の俳句を作らうと思つて作つたといふ句に碌な句があるわけではない。その人の感じが土臺になつて出來た句でなければ價值はない。假りに萬葉調と唱へるものが若干あつたところで、雑詠の大きな流れから見たら畢竟一部の小波瀾に過ぎない。萬葉調がどうだと言つて喧しく議論するのは閑人の閑事業だ。それは放つて置いたらよからう。

(昭和三年十二月)



## 作家を導く

各作家が自分の句の長所といふものがどういふ處にあるかといふことを意識しないで、たゞ漫然と句を寄越して居るといふのは、殆ど百人同じやうな状態である。然しながら私から見ると、おのづから其人の長所とも認むべき所が、年月を経てゐるうちに少しづつ明かになつて来る。さうしてその長所と認むべき點のよく現はれた句を採録することが度重なつて来ると、やうやく其人自身にも自分の長所がこんな所にあるのであらうかと意識するやうになつて来る。意識しないでも自然々々その傾向の句を作るやうになつて来る。さうしてやうやく雑誌中に頭角を現はすやうになつて来る。かくの如くなつて進歩して行くのであるからして、雑誌は俳句修業の道場であつて、少しでも長所のある、どこか一點探るべき所のある句はこれを採録して、その作家に進むべき道を教へてやることを心掛けて居る。

(昭和三年十二月)

## 操つてゐた糸が切れる

諸君が俺の俳句はかういふ所が長所である、俺の俳句はかゝる點を以て優に俳句界に地歩を占めることが出来るのであると漸く自任するやうな態度を取ることがある。長所を自任するのは結構なことだが、もつと延び行く長所を其處で止めてしまうことになるのを恐れる。殊に最早自分は獨立が出来るものと考へて、旗幟をひるがへして一家を成すといふ様子を見せる時に殊にその感じがする。私かに糸を操つてこゝまで来たのであるが、もう此糸はこれ限りで切れてしまふのであるかと幾分淋しくもなる。尤もその人自身は獨力で、それから自由に先に進むことが出来るといふ自信があるのではあらうが、併し大概は其れ限りになつてしまふ人が多

す。

(昭和三年十二月)



## 作 と 批評

鑑賞力の發達したものが俳句の選者になるとすれば、その作の可否を最も明白に論議するものが批評家になる。鑑賞といふものは感じの問題であつて、批評は理論の側に屬する。此兩者は往々にして一致することがあるが、然し必ずしも合致するものと言ふことは出来ない。

理論としては作家と選者と批評家といふものは別々のものであるといふ議論が正しいと思ふ。俳句を作る技倆がなくても鑑賞力が發達して居るものが選者となり、何等の作をしなくても、面白味を系統立て、何人の頭にも了解出来るやうに説明することで出來得るものが批評家となる。然し之は理論の上であつて實際的に考へて見ると、俳句といふやうな特殊な文藝にあつては、句作の修練を経たものでなければ、優秀なる選者たり得ないといふことになる。批評家もまた同じことであつて、實際の作句に當つて見た経験がなければ明徹なる批評をすることが出来ないと思ふ。實際秀でたる作家の中に秀でたる選者を見出し、また秀でたる選者の中に

秀でたる批評家を見出すといふ傾になつてゐるのである。

それで今の俳壇に就て見ても、自ら選者と名乗つて居る人々の中にも随分いかゞはしい人々がある、といふのはとりも直さずその選者の作句の修練が未だ至らないといふことに歸著する様に思ふ。また俳句の批評を試みて居る人も多少あるが、その批評に何等の權威がないといふのも、取りも直さずその人の作句の修練がまだ至らないといふことに歸著するやうに思ふ。

たまく俳壇以外の人が俳句を論議してゐるのに遭遇するが、是等は殆ど俳句の何たるかを解しないもので一笑に値しない。芭蕉を論じ一茶を論ずるに當つても概念の露出してゐる俳句文章をよすがにして漸く説を操つてゐるに過ぎない。其論は少しも俳句の實質に觸れない。

(昭和四年四月)

## 俳句の翻譯

私がかねてから斯う思つてをる。俳句を翻譯などすることは無益なことであつて、その面白



味を西洋人に知らしめたいといふならば、西洋人に日本語を解からし、日本に生活させ、日本人同様にするより外に方法はないと思ふ。このことは嘗て中央公論に書いたこともある。俳句は言葉の斡旋から来る興味といふものが大部分を占めてゐるし、其の言葉の斡旋具合で景色感情を傳へるものであるからして、日本人にあつても餘程修業を積んだ人でなければ本當の面白味を解することは出来ない。之を西洋語に翻譯してどうして其の面白味を傳へ得ようか。翻譯といつたところで、唯その意味を汲みとつて註解をする程度のものである。本當の面白味を知るのは西洋人が日本人の生活をし日本の言葉を知り日本人になり切つた上でなければ駄目だと思ふ。第一日本人にしてからが俳句の趣味を解する人はまことに少ない。その少ない人の中でも殊にわれ等の客觀描寫の俳句の趣味を解する人は極めて少ない。況して西洋人に翻譯などをして本當に俳句の趣味を傳へようとするとは、それは全然無駄なことであると考へる。が然し諸外國の人々が俳句といふものを知りたがつて居るといふことはまことに結構なことである。初めは千代の句とか、一茶の句とかいふ主觀の強い句から判らせ、だん／＼と客觀の俳句の方に導いて行くことが出来れば結構なことである。やがて熱心な俳句研究者が出て、日本人の生

活をし、日本の言葉をつかひ、本當の俳句の趣味を解するものが出て來ることも庶幾せられな  
ることであるまゝ。

(昭和四年五月)

### 山會(文章會)について

元來ホトトギスは俳句と文章とに重きを置いた雑誌であつて、或る時は俳句よりも寧ろ文章に重きを置いた時代さへあつた。子規居士の生存中でも、山會と稱へる文章會を開いて、子規居士の枕頭で私達の作つた文章を持ち寄つて朗讀し、各々の批評を聞くといふやうなことをして居つたのである。子規居士歿後も矢張り引き續いてこの山會が開かれて居つて、夏目漱石の「吾輩は猫である」伊藤左千夫の「野菊の墓」私の「風流懺法」なども皆この山會で讀み上げられたものであつた。その後夏目漱石が小説に筆を執るやうになつてから、又別の文章會が漱石の家で開かれて、吉村冬彦の「團栗」とか鈴木三重吉の「千鳥」とか、野上彌生子の「七夕」



とかいふものは、その文章会で読み上げられたものであつた。さうしてそれ等の作品は皆ホトトギス誌上に掲載された。その後又ホトトギス発行所でこの山會を開いて、新進作家のものを奨励したこともあつた。が、最近のほゞ十年間といふものは、私も主として俳句の方に力を致し、又澤山の新進作家も輩出するし、俳句會が空前の進出をした爲めに、自然文章の方には充分に力をのばす餘地がなくて、その文章會といふものも打ち絶えて今日まで來たのである。

山會と云ふと際立つた會のやうであるけれども、然し所謂第一次第二次の山會であつても、毎回立派な作品が飛出すと云つたやうなものではなく、愚作駄作が随分數多く出た中で、偶々秀でたる作が出て、其れが今日までまだ輝きを失はぬといふわけである。今回催してみやうといふ所謂第四次の山會であつても、決して直ぐ傑作が飛び出すものとは思はれない。長くやつてゐるうちに、不圖した感興からめい／＼自分でも思はぬ作品が出来ることもあらうし、又思はぬ人が現はれて來ることもあらう。先づ氣長くやることである。

(昭和四年十一月)

### 一方の旗頭

一方の旗頭になるとどうも腕前が落ちてゆくらしい。大體自分の城を築くには、それだけの實力と自信があつて築くものと、實力も自信もないが、唯我が強くつて後進から追ひ付かれ追ひ抜かれるのがくやし／＼と、自分だけの殻を守らうとするものと、この二つがあるでせう。後者の場合は勿論のことですが、前者の場合であつても、城を守ることに急であつて、作句の方はお留守になるか、さうで無くつても、自分の好むところに奔つて、自恣に陥つて、其作句は不知不識の間に墮落してゐるといふやうなこともあるやうです。

一國一城の主になるとかく舊主に弓を引きたがるものが多い。弓を引くことは餘り愉快なことでもあるまいが、さうしないと己の立場が作れないからであらう。私は一切情實を排して選句をするから、成績が悪ければ誰でもかまはずどし／＼棄てます。だからはじめの間は投句してゐても、二、三回出して止めてしまふ人が多いのです。所謂一國一城の主になつて見ると



さういふことは自分の部下に對して不體裁とでもいふのですが、或は自分の尊大を潰されるとでも考へるのでせう。二、三の者に對しては、私としては言ひにくいことであつたが、併し卒直に、雜詠にだけは投句したらよからう、と再三言つた。其言つた當時二三回送つて來たが、長くは続きませんでした。併し選句の成績如何に拘らずつと句をよこしてゐるものも少くありません。

(昭和五年二月)

### 「寫生」を目標に

寫生といふ言葉は大變誤解され易いといふことは私もよく知つてをります。しかし實際俳句をやる人達を導く上には、簡明な過の少ない目標として「寫生」を掲げてゐます。

寫生といふことはいくらでも深くなります。進むに従つてだん／＼奥深い目標となつて行きます。要するに自然人生を疎かに見てはならないことに歸着します。さういふところになると

凝視と沈潜とが含まれてゐなければなりません。稍々進んだ人には其意味で説きます。唯見たまゝを寫せといふことは第一歩の人に説きます。子供に自由畫を書かすと一般です。漸く進めば深く思ひ簡單に描くといふことになります。

常にもとに立戻つて自然人生を見よと唱へる必要があります。

(昭和五年二月)

### 京都風と江戸風

京都といふところも兎に角あの土地に爛熟した一種の文化がある。其現はれとも見るべき生活状態に美點があると思ひます。一例を言つて見ようなれば先年、西行庵といふ庵室の庭に這入つて俳句を作つてをつたことがありました。五月雨の頃で、其庭の木にも石にも縁にも蝸牛がうよ／＼と居りました。足許にも這つて來れば、目の前の芭蕉にも石燈籠にも這つて居るといふ有様でした。私はどんな人が住つて居るのか、其も知らずに、人に導かるゝまゝに庭に這



入つて行つたので、唯蝸牛が面白かつたので、其方に氣を取られてゐると其庵室の中に俄に女の聲が聞えはじめたので、ふと聞き耳を立てると、女の聲で、少し耳の遠いと思はるゝ庵主に洗濯物のことなんかで話してゐるのが聞えました。「此頃はクリーニングといふものがあるさかい、雨が降つたかて洗濯は出来る。」とか何とかいつて、庵主の世話を焼いてゐるらしかつたのです。あとで聞くと、庵主は小文こぶんとか稱へる人で七十餘の老人で、唯一人居るのださうでした。其の女は藝子揚句で、人の妾になつてゐるものだとのことでしたが、ひま／＼に来て、此小文さんの面倒を見てゐるものだとのことでありました。何か外に理由があるのかも知れないが、これだけのことを聞いて、矢張り京都だなどいふ感じがした。まあこれは一例でありませんが、そんなところにも京都といふところの面白味はあると思ひます。

江戸風とは、質實で禮儀たゞしいのでせうね。一つの文化が打ち建てられたところだから、さうなくてはならぬと思ひます。何でも窮極するところは無駄がないといふところになるのだと思ひます。上方風のいゝところも「無駄がない、無駄をしない」といふところにあるに違ひありません。少數交際した江戸氣質の人は大概さういふ風に觀察されました。

(昭和五年二月)

### 鐘に撞木が當るやうなもの

私には、別に形のきまつた曲尺とか鯨尺とか又は近頃出来たメートル尺メートルとかいふやうなものが、ありさうには思へない。からだの中のどこを探してもさういふものは見當りさうにない。よく俳句の選をするに當つて、かういふ用語は嫌ひである、かういふ句法は好まない、甚しいのになると、かういふ字を書く人の俳句は絶対に嫌ひだといつたやうな、物指をふりかざす人があるものであります。又ある狭い城廓を守つてその城廓外のもものは、自分は採らない、と主張するものがあります。私はさういふのとは違ひます。これを例へて言へば、物があつて鐘がひびきを發するやうに、私自身でも明白に自分の音を意識してゐないが、向ふから來てくれるものによつて音を發する。或る人の句が大きな撞木であるといふと、私の心も大きくひびく。又今度は他の小さい然しながら堅い棒がぶつかる、それに應じたひびきを發するといふ



ふうであります。

(昭和五年九月)

### 西洋人に俳句の趣味は判らぬか

西洋人に俳句の趣味は解らぬといつてをる足もとに、日本人で俳句の趣味の解る人が幾人あるかを省みねばならぬ。それと同時に従来西洋人によつて日本の美術工藝の美が意外にもその価値を発見推賞され、それより後に日本人が驚いて足元をふりかへつて見たといふやうな事が、往々にしてあつた事も亦注意しなければならぬ。西洋人であつても日本の言語風俗習慣に馴れ親しんで行つた結果、俳句の趣を解する者が出来ないとは決して斷言する事は出来ない。反つてその西洋人によつて日本人が覺醒され教育される時がないとも限らない。

(昭和五年九月)

### 波瀾重疊とも見える

ホトトギスは私の専制政治であつて、ホトトギス發行所は私個人の事務所である。随分他人から見れば眼に餘ることも澤山あるであらう。ホトトギスをはじめ三十四年になるが其結果私をして敢て斯ういふ態度を採らしめるやうになつたのである。云はゞ根底の深いものがある。一朝一夕の故ではない。

雑誌が單調だと云ふことは何時も聞く批評である。さうして其批評はたいがい局外者から聞く。局外から見るとホトトギスの如きはたいへん單調な雑誌に見えるであらう。しかし親しく俳句を學んでをりホトトギスに交渉の深いものゝ目から見たら波瀾重疊とも見えるであらう。私自身にしても決して單調とは考へない。が、それかと言つて局外者の言が誤つてゐるとは云へない。單調とも見えるであらう。又波瀾重疊とも見えるであらう。そこにホトトギスの生命があるやうな心もちがする。



ホトトギスは挿繪が皆無で、紙面に柔か味が無くてまるで活字の行列であるといふ説はまことに其通りである。しかしホトトギスが斯くなり來つたのも自ら経路があつてここまで來たのである。嘗ては文藝雜誌の中でもホトトギスほど挿繪に最も力を盡し惜みなく頁の多くの部分を割いたものはないのである。はじめには浅井黙語、中村不折、下村爲山、中頃は平福百穂、小川芋錢、石井柏亭、川端龍子、渡邊與平其他の諸畫伯が縦横に筆を振ふたのは實に我がホトトギスであつた。それがだん／＼變化して、挿繪といふものは一頁も無くなり、活字をなるべく詰め込むといふのが從來の體裁であつたのである。が、この頃、立子の編輯してをる「玉藻」によつて刺戟され、從來のホトトギスの體裁に一變化を試みようかと考へてゐた矢先であるから、昔に歸つて挿繪を加へて見ることも又好ましいことであると思ふ。

(昭和五年十月)

### 雜詠 豫選

雜詠の豫選者公定といふことは屢々私の念頭に起つたことである。實際投稿者五千句數二萬五千といふ數を一人で閲するといふ事は困難なことである。從來でもたけしその他一二の人に下見をして貰つたこともあるし、又こゝ一年間ばかりは二十人餘りの人に試に交替で豫選をして貰ふといふことをやつて來たのである。豫選をして貰ふといつたところでの豫選に漏れた句は私が見ないと云ふ譯ではない。否豫選以外の句に遺珠があるのを喜んでこれを拾ひ採るのである。豫選をするといふことは、實際大いに疲勞を少くすることであつて、極端に云へば「この豫選者はこんな句を採るのか、その外にこんないゝ句があるのに、何故これを落してこんな句をとるのか」なるほどの豫選者の採つたこの句はいゝ、この豫選者の選句の技倆はまづ／＼いゝ、と云つてもよからう」などゝ、さういふ點に興味をもつて知らず識らずの間に句稿を閲することが出来る。だから同じ句稿を閲しながらも、單獨でやるときは十の疲勞を感ずるものが、豫選者がある場合は五の疲勞だけで遣れるといふわけである。私は丁度これを旅をする時の道伴に喩へるのである。道連のない場合は、四五里の道でくたばるのを、道伴がある場合は覺えず九里、十里の道を行くことが出来るのと同じである。斯くの如き方法でも執



らねば、とても一人で二萬五千といふ句を見ることは不可能である。で、從來一年間試み來つた假りの豫選方法でいよ／＼私の所信を確めた。

過去一年間の試みの豫選に於て、大體豫選者の技倆といふものも測定し得た。尤も中には多忙のため十分に豫選に力を盡すことが出来なかつた人も多いだらうと思ふ。それらも大概は見當がついて居る。作句の技倆が拔群だと云つても選句の技倆が必ずしも之に伴ふとも云へない。又作句の技倆が十分でなくても選句の技倆がなか／＼に侮り難い人もある。

しかし作句の技倆の優秀な人は選句の技倆も是非それに伴はねばならぬものと考へて居る。たゞ、今まで句を見ることが少ないために陳腐なものを探るとか、若くは月竝俳句に経験のないために、月竝が／＼つた句を新らしいものと誤信してこれを探るとか、若くは文字の整はないのに氣がつかないで探るとかいふ類のものも多いであらうし、且又前に云つた選句といふことに忠實でない疎漫な態度から來ることもあるであらう。それらの人々は克く氣をつけて常に私がいふやうに、選句といふものも亦一種の創作であつて句作と共にあなどる可からざるものであること、殊に後進の有力なる作家を生み出す爲には、選句者の力が半ば以上に居るといふこ

とを考へに置かねばならぬ。されば雑誌の豫選者といふものも、獨り私の勞を助けるばかりでなく、亦自らの修養にもなるといふ意味もあると思ふのである。

(昭和五年十月)

### 歳時記

私達が俳句を作り初めた頃には曲亭馬琴の拵らへた歳時記が一つあつたばかりであつて、その外には更にさういふ種類の書物はなかつた。その後暫らくの間は同じ状態が續いて來て誰も手を染めるものはなかつたが、一々歳時記をひっぱり出すのを億劫がるところから、袖珍の季寄を作つたら便利だらうと考へて自分でやらうかと思ひましたが、その時分比較的暇であつたと思はるゝ佐藤紅綠君に頼んで拵らへて貰つたのが現在俳書堂で發行してゐる袖珍季寄の前身である。現在發行してゐるものは紅綠君の拵へた季寄の上に大分季題を加へて居るやうである。又その頃の俳書堂主人榎山梓月君の發意から中根無涯氏に囑して新修歳時記一冊が發行さ



れた。之は最も厳密な選擇になつた書物であつて私達の座右に備へて置いて日夕の参考とするのに最も便利な書物であつたが大震災の時にその紙型が焼失してしまつて重版することの出来ないのは残念なことである。然しながらこの新修歳時記も主として人事、殊に宗教上の儀式に關する事は舊曆によつてゐる。東京在住者にとつてはそれ等の行事は悉く新曆にひき直して行はれて居るので、夏の季題が春になつたり秋の季題が夏になつたりして居る事などが澤山あつて頗るまぎららしい。尙ほその他句作する上に於て今日から見れば迂遠と思はれるやうな季題も澤山生じて來て居るので、それ等の點を考へて俳句を寫生するのに格好な季寄せを新選する必要があると感じて、敢て完全を望まないが、すべて新曆により、且つ寫生を目的とした季寄を編纂して、それをホトトギスの附録にしたことがあつた。

大震災後になつて種々の歳時記類が出版されて、それ等の書物は争うて新題を取り入れて居るやうである。私は詳しくそれ等の書物を見ないからこゝに何ともいふことは出來ない。

(昭和五年十二月)

### 素人・玄人

能樂の方なんかでは、素人、玄人の區別が極めて判然としてゐる。然しひるがへつて我が俳句の方面をふりかへつて見ると、其區別は判然としてゐない。私などから見ると俳句を作るのに素人といふべきものはないと思つて居る。俳句を作りはじめるとなれば、かりそめの修業で上手になれるものでもなく、十七字を並べるといふだけでは本當に俳句を作るとは言へない。

素人、玄人の區別をつけるのに、その技によつて金を得て衣食するものが玄人であつて、月謝をはらひ、金を出してその技に遊ぶものが素人である、と、いふやうな定義を下した人もある。それは主として能樂などの藝術についての話である。が、それも俳句には當てはまらないやうである。現に俳壇の人で俳句によつて衣食するといふやうな態度に居ない人でも、立派な専門家がある。

(昭和六年二月)



## 自然の儘の公園

私に一つの空想がある。それは東京から餘り離れて居ない、三十分か一時間位で行ける處に稍々廣袤の廣い自然の儘の森林原野があつて、その中を貫通して居る道路だけは立派な道路が欲しいが、其他の草木等には一切手を着けなくて自然のままに放りばなした公園、と云ふやうなものがある。公園といふと、従来は上野公園とか芝公園とか、稍々自然の趣が残つて居ると云ふやうな處もあつたが、日比谷公園以後の公園になるとさういふ趣は殆どないし、立派な庭園を公開したものもあるけれど、さう云ふ處も、極端に人工の加はつたものであるから面白くない。唯有りの儘の自然の姿、さういつた公園が欲しいと思ふ。之はひとり俳句を作る便宜な爲め許りでなく、普通の人の中でも、此種のもを好み、散策等に好適の場所とするであらうと思ふ。吾々俳人にとつてはさう云ふ場所の春夏秋冬の移り變りを見ることに依つて所謂花鳥を諷詠するのに最も便宜を得るであらう。初め武蔵野探勝を思ひ立つたのも、武蔵野の自然

の姿を鑑賞したい爲であつたが、その自然の姿の多く破壊されて、纏つた林すらも殆ど絶無なるに愕いて居る様な次第である。さういふ自然の儘の公園も一つ位は東京近郊に有つてもよからうと思ふのである。

(昭和七年四月)

## 質問の針にかけて

私も、時に觸れものに應じて俳句の上になつても、意見が起り、感じが浮む事がある。が然しその意見や感じは長く頭に留まらないで、直ぐ忘れて仕舞ふ。さういふ事が積り積つて今日に到つて居る。自分で俳句に關する文章を書かうと思つても、ちよつと其等の考は容易に引き出せない場合が多い。それを誰か旨く質問の針に掛けてくれると、豫期しないで、自分の貯へて居る處の自分の考をわけもなくすく／＼と出し得ると云ふ便宜がある。尤も纏つた一つの意見となる迄には相當な頭の働きを要することであらうが、嘗て誰か云つたことがあるやうに、



纏つた考よりも、片々たる其等の斷想の方が、より力強いといふ場合が多い。私にしても誰かから質問を出されて、意見を吐く機会を興へてくれる事は希望するところである。尤も中には質問に應ずる力の無いものもあらうし、疎なお答の出来ぬものもあらうが、兎に角さう云ふ機会を興へて下さると云ふ事は私に於ても希望するところである。

(昭和七年四月)

### 書き留めて置き度い

選句をして居る場合に、ふと感じる事があつて、書き留めて置きたいと思ふことがある。然し其簡単に書いた事がよく諒解されるのは少數の人であつて、多くの人は何のことだか分らぬのである。要はそれを受入れる人の頭の出来具合に據ることであつて、判る人は判る、判らぬ人は何處迄も判らぬ、といふことになる。現にさういふ場合に、あれはどういふことを意味して居るのですか、と云ふ質問の手紙が舞ひ込むことが澤山にある。

### 句を作る時のさまぐ

(昭和七年四月)

興に乗つて句を作る場合に、立派な句が出来ることは素よりあるが、又上辺りがして措辭等の上に缺點のあるのに氣附かずに居るやうな場合もある。それから心が沈んで句が出来難いやうな場合に、却つてその沈んだ心持の中に立派な句が胚胎する事も往々にしてある。それは一概に云ふわけには行かと思ふ。が、さういふ心持に住して居るといふ事も、又面白いことである。

又二度も三度も句會をやつて、心の興奮し具合で、却つて、二度目、三度目位に良い句の出来る場合も往々にしてある。又一回切りの句會の方が、充分に心を打ち込んで作れるといふのも本當だ。要は人によること、又其時の具合によることで、一概にはいへないと思ふ。孰れにしても自分の境地に住して作つて行くがよからうと思ふ。又一轉化の起る度に、句の境界が進



んで行く、と云ふ事は事實である。

(昭和七年四月)

### 中川四明・草間時福

中川四明翁は私の京都に行つた時分には、よく訪問して、俳句を一緒に作つた仲間でした。四明翁は、燈臺局長であつた草間時福さんの兄さんでした。草間翁(燈臺局長で退いた)は昔松山中學の校長になつて來られたことがある。沼守一だの、島田三郎だの、櫻鳴社の一人であつたといはれる草間翁のことであるから、中學校の校長兼海南新聞の社長であつて盛に政談演説などをやられたものであるとか聞いてをる。其時分學生であつた子規も其感化で演説會をやつたことがあるとかいつてゐた。

(昭和八年九月)

### 花野

花野、といふのは昔は内地にも澤山あつたものであらうがだん／＼開墾されて、到る處が田畑になつて今は高原にでも行かなければそれらしいものは見られないのである。私が知つて居るだけでも、昔多摩川の畔などは一面の芒原であつて、その芒の遠く連つて居るさきに白帆が遠望される所などがあつた。

芒野や左多摩川行く白帆

詰まらぬ句ではあるが、全く其當時の實景を言つたものである。それが此頃の多摩川の兩岸は悉皆田畑になつて居て、そんな芒野は見られなくなつた。それが北海道に渡ると一望千里と云ふ野原に芒や萩や女郎花や男郎花、擬寶珠、ゑぞにう、七つ葉等が咲き連つてゐるのを見るのも珍らしくない。花野といふ感じは北海道に渡つて初めて得られたやうな心持がしたのである。



序に此七つ葉といふ草花は北海道特有の花であると云ふ事であつて、同行の阿満圓嶺君が、何とか云ふ歌があると云つて——蝦夷の乙女に限つて簪かざしにする、と云ふ意味であつたかと思ふ——北海道のみにある草花であるといふ證據にしてゐたが、歸りに盛岡近くの岩手山の山脈が延びて居る好摩と云ふ驛の邊であつたらう、七つ葉が澤山あるのを見つけたのであつた。名前は違つて居るかも知れないが、北海道の七つ葉と云ふ草花は確かに岩手山の麓の高原にある事だけは明かになつたのである。北海道到る處澤山見た男郎花も同じく岩手山の麓の高原に澤山有つたのである。

七つ葉は岩手の山の麓にも

(昭和八年九月)

昔話

私が國の中學校にゐる時分は勉強家の方で教科書を悉く暗記してゐる位でありましたが、其

中學校を出る前の一年ばかりは本屋に入りびたりになつて文學書を漁つてゐました。店頭に「早稲田文學」の一號が来てゐたり、又「國民の友」の夏季附録が初めて出て來たのも其頃です。美妙齋の「胡蝶」、鷗外の「舞姫」、それから坪内逍遙の「細君」、露伴の「一口劍」などが其夏季附録に出てゐたやうに思ふ。尙本屋を漁つて居ると、森鷗外編輯の「しがらみ草紙」と云ふ雑誌が唯一部だけあつたのが目にとまつた。それから「早稲田文學」と「しがらみ草紙」で逍遙と鷗外の没理想論などが始まつて賑やかであつた。それより前には政治家になるつもりで寺を借りて演説會をやつたりしたこともありませう。又廻覽雑誌を作つて、それには政治を論じたり、歌や感想文のやうなものを載せて喜んでゐたりしました。同級生であつた碧梧桐から正岡子規が東京で文學を専攻してゐると云ふ話を聞きまして、その正岡子規の家は私の生れた家と恰度背中合せの家でして、あの正岡の子供かと私の兄なんか言つたことがある、それで一寸懐かしくなつて頻りと文通をはじめたものです。それから俳句のあることを知つたのですけれども私はどうも小説家の方が面白さうなので俳句を輕蔑してをつたのです。京都の高等中學へ文學専攻の志望で出かけましたが俳句を専門に作るといふやうな考はなかつたのです。が、



いつの間にか俳句も馬鹿にならぬと云ふ考が出来て来て種々曲折があつて俳句専門と云ふやうなことになつたのです。

京都の高等中學にゐた時分には寫生文と云ふものはまだなかつたです。寫生文といふものを意識して書いて見る氣になつたのはホトトギスを出すやうになつてからで、それより前は小説をどこまでも書きたい考であつた。椎花さんの主幹する「反省雜誌」——中央公論の前身——にくだらぬものを書きましたよ、椎花さんから原稿料を貰つて嬉しかつた。

日曜には必ず草鞋に脚絆を穿いてさういふ扮装で句を作りに出るのが得意だつたんです。

私の母は、體の小さい、色の白い、壯健な女でした。私を「清さん」とさんづけにして呼んでゐました。それから「危ない〜」とあらゆる危害から遠ざけようとして、川の傍へも寄せませんでした。源氏を讀んだわけでもないでせうが光源氏の話をしたり、清少納言が瀧をかゝげた話などをしてくれました。又お伽噺をよくしてくれました。張り交ぜの屏風に、船に一人の旅人が乗つてゐて、桃の咲いてゐる岸を船頭が指さしてゐる畫があつた。其畫をさして、「いつか宮島に行つた時には此繪のやうに長閑な海であつた、清さんが歸らう〜」といつ

てお泣きたのには困つた。」などと話したことがありました。それに歌をつくりました。私に文學的の感化を與へたのは主として自然の環境であつて、私の小さい時分にゐた風早の風光であるが、其自然と、其母とに何となくはぐくまれたやうな氣持が致します。

(昭和九年二月)

### 私の東京に出た時分

私が東京に出て來た時分には老鼠堂永機とか雪中庵雀志とか云ふ宗匠が威張つてゐたやうに思ひます。

紅葉一派も作つてゐたでせうが、併し小説の餘技であつたのでせう。

秋聲會は竹冷が主になつてやつてゐました。

(昭和九年二月)



私は「しがらみ草紙」や「水沫集」等を讀んで鷗外には敬意を拂つてゐました。で鷗外に逢つてみたいと云ふやうな考を持つてゐたです。けれども私から進んで逢つたと云ふ譯ではなく——どうも記憶がはつきりしませんかね——日清戦争を境にして「しがらみ草紙」がなくなりまして、戦争がすんで鷗外が凱旋して歸り、「めざまし草」が出るやうになりました。それを出す時分に私が頼まれて俳句を出したのは事實ですが、何う云ふ關係か記憶しませぬ。それから月に一二度行かなくてはならなくなつて行くやうになりました。

朝霜やちやらんくんと馬の鈴

と云ふ句を作つて出したことがあります。露伴がそれを評して、いゝ句だがちやらんくは春風でなくてはいかぬ、朝霜だつたらちやりくでなくちやいかんと評したことがあります。鷗外も此頃から俳句に興味を持ちはじめたものと思ひます。鷗外が私の

大根の花 紫野大徳寺

といふ句について、俳句といふものは面白いことがいへるものだ、と態々手紙をよこしたことがあります。私の二十三四歳の頃のことです。

子規が根岸で俳句會をやる時分に、鷗外にも案内して見てはどうかといふと、案内して見ようとして手紙を出した。會が半ば進行してゐる時分に鷗外がやつて來たことがあります。其時作つた鷗外の句は「めざまし草」に出したやうに思ふ。

(昭和九年二月)

子規の話

子規も初めは俳句を専門にやると云ふ考はなかつたらうと思ふのです。矢張り小説を作つてみたいと云ふ考があつた。現に子規が大學から郷里に歸つた時分に喜安と云ふ今鐵道省に居るあの喜安の兄ですが、現に英語の雑誌を出してゐます。それも其頃は文學青年の一人でありま



して、子規が歸省した時に、子規に其等のグループに講演して貰つたことがあります、その講演の歸りに子規が私のところへ寄り、私は小つぽけな二階に居たんですが、下から、居るかと言ふから、居ると言ふと子規が這入つて来て、「今講演をして来た、斯ういふ書物があるが、この書物に就いて文章の講演をして来た」と言ひました。見ると浪六の「三日月」と云ふのでありました。子規が話すのに「文章は調子がたるんでゐてはいけない、どうしても調子の張つた力強い文章でなくてはいけない、此の「三日月」は下品な下らないものではあるが然し文章の調子が張つてをる。」とさういふのでした。子規は其頃は露伴好きで、浪六も文章はどこか露伴に似て居るところがある、それで新版として出たこの「三日月」について講演したのだと言つてゐました。その時分子規は大學の試験を受ける爲に、其試験準備の爲に、駒込のどこかに間借りでもしてゐたのでせう、そこで試験の準備をしようとしたのですが、それがうるさくて嫌やで、小説を書いて居る、その小説は「月の都」と云ふので、それを書いて居るが、どうも小説の方も筆が進まぬので困つて居ると言つて來ました、それが今の喜安の講演の前後——記憶が隳げだが——で、専ら小説を書いて居たから文章に注意が拂はれて居つたかと思ふのであ

ります。今「月の都」の筆を擱いて圓に行つて手を洗はふと思つて雨戸を開けると、手洗鉢の上に笹がおつかぶさるやうになり雪が積つて居る、その笹を送ると言つてよこしましたが、笹の一枚々々に俳句が書いてありました。その笹は今も書翰と一緒に保存してあると思ふが、兎に角俳句が一枚々々に書いてありました。「月の都」についてもつと話す、月の都を書いて了つて後に其を懐にして露伴を——露伴が天王寺の近所に住んでゐた時分に——訪うてそれを露伴に見せたといひます。實はこの小説は露伴の「風流佛」の影響を受けて居る、形式に似て居るところがある、その他にも露伴の影響を受けて居るから露伴に見て置いて貰ふ必要があるので露伴に見せていろ／＼話したが、どうも自分は江戸つ子ぢやないから小説を書くのは不適當だ、それに人間を書くことは不得手だから、小説を書くことは自分に向かない、天然が好きで俳句に向いてゐるからこれから俳句の方を専らやらうと思ふと云ふ手紙を寄越しました。さういふ意味でなかつたかもしれぬ、間違つてゐるかもしれぬ、そんなやうな手紙でした。それ以來俳句専攻の志を愈々定めたものとも見ることが出来る。尤も大學の學生時代から大學の圖書館に通つて俳句分類を絶えずやつてゐたのだから根底が深い。けれどもはじめは俳句もやつ



てみよう、小説もやつてみようと思ふ。それより前子規は都々逸、端唄、漢詩、何でも作つて見るといふ男でした。それが主として俳句に傾いたといふのは、此頃からであつたらうと思ふのであります。

其戎と云ふ月竝俳人に、まだ松山の中學に居る時分に子規は俳句を見て貰つて點をつけて貰つたことが一、二回あるらしい。だからはじめの俳句は月竝であつた。子規は大原觀山と云ふ漢學者の孫で、家庭の影響も大きく、七、八つ頃から四書五經の素讀をし十二、三歳の頃から詩文を作つてゐた。それから子規は貸本屋から馬琴のもの京傳のものなどを借りて盛んに讀んだといふことです。

子規の「月の都」は露伴の手許に暫く預かつてゐたらしいです。二葉亭の手にも渡つたらしいです。文壇に紹介しようと云ふ考があつたかも知れぬけれども世の中へ出すに子規の手に返つて來たのです。それは日清戦争前に子規の編輯してゐた「小日本」と云ふ四頁新聞に出たのです。

仲間の俳句は皆この「小日本」に發表されました。日本新聞は藩閥に對抗してゐたから屢々

發行停止になつて、解除されたと思ふと又停止と云ふ風でした。それで日本新聞が發行停止になつたときに代りに讀者に送る爲に「小日本」を出すやうになつたのです。子規が主幹で編輯を受持つてやつてゐました。古島一念が社説を書いてゐました。五百木飄亭が艶種を書いてゐました。そしてその時分露月が「小日本」の校正に雇はれました。不折も「小日本」に入社しました。

子規の叔父さんの加藤拓川が日本新聞社長の陸羯南とは親密であつた關係から陸に紹介され、日本新聞に這入るやうになつたものです。

子規の健康は從軍前から悪るかつた。とめる考もなかつたとめなかつたのか、とめたけれども背かなかつたのか、記憶がぼんやりしてゐるが、兎に角從軍は無鐵砲だつた。向ふへ——金州へ——渡つたら休戦になつてゐて一つも鐵砲の彈を見ずに歸つて來たのだ。

日清戦争前、示威の爲めに鎮遠定遠が横濱に來たことがみんなの膽を冷やしたものだ。日清戦争は大變なことがおつばじまつたと云ふので國を擧げて戦はなくちやならぬと云ふ意氣に燃えてゐましたよ。報國の意氣が旺んで、その時分の文學者の考は今とは違つてゐました。子規



が長い手紙を碧梧桐と私とに連名で寄越しましたが、半紙で十幾枚といふ非常に長い手紙で十分な決心が書いてありました。従軍の目的は確とは云つてなかつたが、兎に角斯う云ふ機会に従軍してみたい、千載一遇の機会だと云ふことが書いてありました。その前に五百木飄亭が兵隊で従軍し、それから中村不折が畫家として従軍し、淺井忠も従軍しました。福本とか古島とか末永とか日本新聞の濟輩は皆従軍してゐました。取り残されたのは子規一人のやうな氣持がしたでせうから何うしても行きたかつたのでせう。行けば何ものかによつゝかるといふ考があつたのでせう、さういふことが書いてありました。忘れもしませぬ、子規と碧梧桐と私との三人が神田の小川町を通つてゐた、別れる時分に子規が之を歸つてゆくり讀んで御覽と言つて懐から出してくれたのが、其半紙で綴じた長い手紙でありました。

子規が歌の研究を始めたのは子規の俳句を稍々世間が認めて來た後です。

子規は何にでも關心を持つてゐた。山會と云ふものも子規の時分から始まつたのです。その頃「曼珠沙華」と云ふ小説を作つたことがあります。——それは松山言葉で書いてあつて乞食の女か何か出て來る。——さう云ふ風にあらゆる文藝に關心を持つてゐたから、俳句の革新を

試みた次が當然和歌に赴いたものです。

大學で萬葉は讀んでゐたでせう。其に香取秀眞、伊藤左千夫、それ等が皆萬葉の研究者だつたから愈々盛んになつて來たのでせう。

私も作れと云ふ命令だつたから作りました。根岸へ引張り出されて、歌人仲間二三人に交つて一緒に作つたことがあります。

(昭和九年二月)

## 私の句日記

私の句帳が大變大きいといふことには別に大した理由もないのですが、たゞ懐に入れたり、まるめて持つたり、その他携帯に便利のために、極粗悪な四、五錢の小學生用のノートブックにすることになつたのです。そして一年目には「句日記」としてホトトギスに發表してそれを境に紙屑となつてしまふのですから。



手帳でも原稿でも大概破つてしまふ。尤も原稿は人に筆記して貰つたのが多いのですが。

(昭和八年九月)

#### ホトトギスの弱味が強味

私の二十五の歳でした。ホトトギスを東京で出すについて體裁とか印刷の方法などについてお話を聴きに「反省雜誌」の麻田椎花氏を訪ねた。

この前、當時同誌の編輯を手傳つてゐた篠原温亭君の紹介で「反省雜誌」に小説みたいなのを載せて貰ふことになつたが、原稿を郵便で送り温亭君が態々報酬を持つて来てくれたことがあつた。

椎花さんはニコ／＼笑ひながら、松山にある俳句雜誌を東京で出すといふことを危ぶんでいゝ／＼と話があつた。

「反省雜誌」——「中央公論」の前身は其頃千五百出して二、三百返品があつた相ですが、

ホトトギスは東京で初號を出したとき千五百刷つて賣切れしました。初號は賣れるものだと云ふことで千五百出したのですが、二號は千二百、三號は千部、それから少しづつ部數が増加して來ました。

錦町で初號を出し、猿樂町に移り、それから富士見町に移りましたが、漱石が「猫」を書きはじめたのは其富士見町でありました。

漱石とは友達と云ふか先輩と云ふか其迄も親しく往き來をしてゐましたが、其頃漱石が機嫌が悪く、奥さんが困つてゐまして、私に話しに来てくれとか何處かへ引張り出してくれとか言つて居りました。それで私は、慰みになると思つて漱石に文章を書いてみたらと勧めて置きました。その頃も私等仲間で山會をやつてゐたから、何日に山會があるからそれまでに書いて置けば行きがけに寄ると言つて置きました。その日に行きがけに寄つてみると非常な機嫌で「君これを読んでみてくれ」と言ふのです。大部なもので一寸位の厚さのものであつたです。其を讀んでゐて、山會に大分遅刻しましたが、其を讀むでゐる時分にも漱石は機嫌でところ／＼ウッフフと笑つたりして「傑作でせう」と自ら推賞したりしました。それが「猫」の初です。



漱石は、胃弱性神経衰弱と「猫」に書いてあります。

瀧田栲蔭の亡くなる二、三年前に中央公論に新作謡曲を書けとのこと、栲蔭が来て百圓やるから書けと云ふ命令で、あの頃としては破格の原稿料でした。「實朝」と云ふのでした。

それより前に「鐵門」と云ふのを書いたことがありましたがそれが栲蔭の頭にあつたんでせう。此「鐵門」と云ふのは最近「善光寺詣」と改題して善光寺保存會で謄本にしました。

ホトトギスの出た時分の先輩雑誌では「文學界」「早稲田文學」等がありました。

富士見町に居る時分に椎花君が珍らしく俵を止めて訪ねて來たことがある。どうしたことかと思つて驚いて迎へた。ホトトギスに漱石の「猫」の出で居る頃でしたが、「時にあなたの雑誌が大變評判でよく賣れるさうだが賣れる理由をきかして貰ひたい」と云ふことでした。明治三十七、八年頃でしたか。その後、中央公論に小説を載せるやうになつた。其頃「中央公論」が餘り出ないで、私のところへ雑誌の賣れる秘訣をきゝに見えたやうです。然し私の方に雑誌經營の方策などいふものがあつた譯ではなく、夏目漱石の「猫」が人氣だから賣れるのであつて他に理由などはないと答へたと思ひます。

「猫」が二年か三年つゞきましたらう。盛んな時分は八千餘り出しました。

漱石が書かなくなつた後も漱石が寄稿者に原稿料をやれと云ふからやることにしましたが、費用が嵩むばかりで、それに私が俳句よりも小説の方に力を注いでゐたので、讀者が去り、非常な經營難に陥つて毎月國の兄から金の補助を仰いで二年ばかり持ちこたへました。それにその頃は健康もすぐれず、これではいかんと思つて、國民新聞をやめて鎌倉に移り、改めて原稿料をすつかり拂はないこととして自分獨りで書くといふ考でやり出したのです。經營難に陥ると今迄共にしてをつた友人も去つて了ふといふ鹽梅で、私一人の雑誌になつてしまつて、何もかも私一人でやる、其頃千麩にボンチを畫いてもらつた。それはお寺の和尚さんも虚子、味噌すり坊主も虚子、小僧も虚子といつたボンチでした。其で此二十年餘りはやつて來たものです。

それがホトトギスの弱味と同時に強味ですね、今まではそれでやつて來ましたがね、今後はどうなるか分らぬけれども……。



## 前書つきの句

前書は俳句ばかりでは意味が十分に通ぜぬ場合につけるといふのが普通ですね。又或る場所或る時に作つたといふことを明示する爲めに前置をするといふ極めて軽い意味のものもあります。

芭蕉の俳句、例へば奥の細道にある句を類集に載せる時分に、前置に簡単な文章が引いてあります。あゝ云ふのは文章と相俟たなければ十分に俳句の味を傳へることが出来ぬといふ編者の用意からだと思ひます。之は話が違ひますが、文章の終ひに俳句をくつゝける場合があるがあゝ云ふのは終りの一句の爲に文章全體が詩化されるといふ傾きがあります。

さういふ文章の終に俳句があると文章まで韻文の趣をなすもので、讀む人に一種の氣韻を傳へる。けれども俳句は元來獨立すべきもので、前置つきの俳句とか慶弔の俳句とか、文章の終りにある俳句とかいふものは第二義に落ちる。然し乍ら其第二義的の俳句があつていけないと

いふことはない。あつても結構だといふことも忘れてはいかん。

(昭和九年三月)

## 俳句に就いての實驗談

私も俳句に對する考——俳話は時々書くことがありますがね、それなんかほんの實驗談に過ぎない。だから理論的に觀たら不完全なものである。其れを善解する人は善解し惡解する人は惡解する。私の言ふた事を攻撃したいと思ふ人はいくらでも攻撃し得る。だけれども實驗談といふものは力強いところのあるもので、論理的には不完全でも、すぐ讀者の心の中に飛び込むものである。多少研究の材料にしようと思ふ人があつたならば研究の材料にならぬこともありません。

昔の俳人に評論家といふやうなものはないといつていいでせう。強いて言へば支考があります。それは理窟にならぬ理窟を百萬遍ならべたので、俳論でも何でもありません。その支



考と云ふ人は最も俳句を墮落させた男といつていい。——芭蕉時代の句がだん／＼月並になつて來たのは芭蕉にも責任がありませんが、併し支考などに最も重大な責任を負はせて差支ない。俳句が徒らに議論に流れるといふことは大に警戒すべきことである。

評論家は議論の立てやうを誇つてゐるやうなもので、理論の爲の理論と云ふ弊害があるでせうね。去來抄位の程度——芭蕉、去來等の「猿蓑」の句に對する意見が書いてあるが、あの程度のもので先づいゝやうな感じがする。

子規は議論が嫌ひでした。

子規は獨斷家だつたですね。その獨斷が正しかつたといつていい。

(昭和九年三月)

## 乙 字

乙字は碧梧桐の弟子で、私とは關係なかつたです。虚子を倒さなくちやいかん、虚子を倒さ

なければ俳句の革新は出來んといつて私を目の敵にして議論したのだと云ふことだが、私はあまり其文章を見なかつた。

乙字は可愛いところのある男でしたよ。乙字の晩年に私のところへ來たことがあります。その時分にこんな話をしたことがあります。池内——たけしの親父ですが、其時分乙字の勤めてゐた音楽學校に能樂の用事で話しに行つた。其時分丁度乙字が池内に逢はねばならん役廻りになつた。そこで應接間で、初對面の挨拶をする時分に、私は大須賀といふものだが俳句の方では令弟とは相識の間であるといふことをいはうとした時に、令弟の虚子と迄口に出て、其あとを何といはうか、虚子先生といはうか、虚子さんと言はうかと躊躇して、遂に思ひ切つて「虚子君」といつてしまつて、脇の下からタラ／＼と汗を出したと云つて話してをつた。稚氣と云ふか、正直なところがある。

(昭和九年三月)



連句に勝れてゐるのは芭蕉

連句を十分心得て居れば却て其爲めに俳句に自由な表現が出来るといふ場合もあるでせう。連句も亦日本に發達した面白いものです。連句となると優れてゐるのは芭蕉だけで、蕪村は面白くない。一句々々には面白いものもあるが連句としてはつまらない。連句は芭蕉に始まつて芭蕉に終つたといつていゝでせう。

(昭和九年三月)

季 題

「季題に捉はれ過ぎる」とか「季題趣味に墮してゐる」とかいふ説も空論では駄目ですね。實例について言はねば。菜の花を正面から詠んだから面白い、又菜の花がつまに使つてあるか

ら面白い、共に面白い句ならば差支ないでせう。

本來は季題そのものを忠實に詠じなければいかぬ、然しながら季題をつまに使ふ場合もある、そして立派な句の出来る場合もあると云ふことを心得てをればいゝ。これも片つぽづけて議論すると間違ふ。本來は季題を本位としなければならぬが、さうでない場合もあるといふ取のけを心得て置く必要がある。

(昭和九年三月)

どの時代も貴い

若い時分の仕事を振り返つて見て、若い時分でなければ出来なかつたと云ふやうなことがありますね。例へば若い男が若い女を戀すると云ふやうなことは、今でも大體の想像はつくが今日では何うすることも出来ない。又大作をやつてみたいと云ふ考は今でも持つてゐるが、根氣がつゞくかつかないか疑問だ。矢張り若い時分には若い時分にやるべき仕事がある。私が常



にいふやうに、二十代の人は二十代が一番貴い、三十代の人は三十代が一番貴い、といふ考を持つて仕事をやるべきだ。其と同時に五十代の人は五十代が一番貴い、六十代の人は六十代が一番貴いといふ風に尙ほ仕事をつづけて行くべきだ。二十代三十代を振りかへつてみると戀し。四十代……それも戀しい。然し乍ら六十代も結構だ。六十代には六十代の仕事がある。

(昭和九年三月)

## 流 行

芭蕉は流行と云ふことを氣にして常に流行變化がなければならぬと云ふことを言つてゐた。たとへば七部集でも「曠野」の時代は多少粗笨であつて「猿蓑」に至つて圓熟してゐる。次に「炭俵」に至ると輕みと云ふことに重きを置いて却て輕みに失し、後世の月竝と云ふものに陥つた第一歩でしたね。

(昭和九年三月)

## 弟子に導かれる

芭蕉は弟子を調育するといふことにも熱心であつたでせうが又弟子に導かれるといふことも考へてゐたでせう。子規も言つてゐたが、弟子を教へながら教へられるのですね。人を導く一方に人に導かれる……導かれるといふ考が無ければ發達しませぬ。

(昭和九年三月)

## 周圍に驚かされぬ

今でも新らしい作家が絶えず出て来る、常に其を喜び迎へてをる。唯私は自分の句は自分の句の領分を守つてゐて少しも周圍に驚かされぬ。

子規は人の句の眞似をしとつたですよ、むしろ其が得意でもあつた。



新しく出て来る人が新生面を開く、それには常に驚嘆してゐる、又常に喜び迎へてゐる、けれども一つの大きな限界の線がある。この線の外には出てゐない。無標準で歓迎してゐるのではない。

(昭和九年三月)

### 片つぼづけて議論をするのはいけぬ

前にも繰り返して言つた通り、若い人はよく片つぼづけて議論する、かうでなくちやならんと云ふやうに、それだから間違ふ。寫生は正しい。一應はかうでなければならぬ。けれども取り除けがある。と云ふことを始終考へてゐなければ間違つて来る。俳句と云ふものは素材なもので、それは俳句の長所と思はれるけれども然し乍ら素材でないものも又あつていゝ。そこをよく辨へなくてはならぬ。

無闇に片つぼづけてしまつてはいかぬ。それでゐて限界がなくちやならぬ。

### さびしをり

(昭和九年三月)

芭蕉のさびしをりと云ふ言葉は、詳しく研究しませぬけれど、芭蕉がある心持を人に分らせたかと思つて言つた言葉に違ひない。芭蕉も俳句が先で理論は後の方で、芭蕉の句作について實際感じたことを後のものに説明しようと思つて言つたことである。芭蕉の自分で持つてゐるところのものはさびしをりと云ふ言葉で言ひ盡せないものがあるかもしれない。芭蕉の句を調べてみてその句から吾等が汲み取り得るだけのものをさびしをりと云ふ言葉だけで説明しようとしても出来ないものがあるかもしれぬ。

弟子共が芭蕉の説を聞いてさびしをりの論を立てたのですね。弟子は弟子の體得してゐるだけのことほか言ふことが出来ないですからね、弟子に芭蕉程の頭がなければ、寂菜の論も弟子だけの廣さのものになる。寂菜なんかいふ言葉は只符牒みたいなもんですよ。芭蕉が自分の俳



句について言ひたいと思ふことを符牒で言ふたに過ぎない。

(昭和九年三月)

## 新しさ

新しさと云ふのは、前にもいつた如く常に深く／＼と志すことによつて自ら生ずるところのものであらうと思ふ。一寸一分でも新しいといふことは其だけ深くなつたんですね。

圓を追つて驅けるが如し、遅れてゐるものがいつか先になつてゐる、と云ふことは本當ですね。人間そんなに新しいことが出来るものではない。

一分の發見で澤山だ。藝術の進歩といふものは一寸一分を進めるところにあると思ふ。刀の鏝や矢立の細工でも……。

(昭和九年三月)

## 一生一句風

芭蕉は生涯のうちでしきりに流行と云ふことを言つて、俳句の一所に澁滞してゐることを大に恐れたやうですが、それについて人間の一生——長いものとも考へられるが又短いものともいへる——その一生の間にそんなに句風が變るものと考へることはどうかと思ふ。私は自分の生涯は一句風で澤山だと思ふ。芭蕉はいくらもがいても遂に芭蕉の句風の外に出ない。人各々其天分がある。變化しなければならぬと考へると、自分を忘れてたゞ新人の跡を追ふといふ見苦しい態度になる。芭蕉がさうであつたかどうかは知らぬが、さういふ態度はよくないと思ふ。自分は確と自分の領域を守つてをればよい。さうして自分の周圍に群り起つて来る新人諸君は求めずして新句風を齎して来る。自分の句風は變らないけれども周圍に起り来る新勢力を絶えず見守つて之を善導する、さうすると俳句はいくらでも新しくなつて来る。其時分に古いものを弊履の如く棄てるといふことはよくない。古いものには古いものゝ味がある。新古とも



に併存して行くことによつて俳句界はいよ／＼複雑になる。私は、自分の句風まで常に變へなければならぬと云ふさう云ふ焦つた心持を持たない。自分であれもこれもやつてみようとしても決して出来るものでない。生涯を一句風にさ／＼けても尙足りない位に思つてをる。何でも然うですよ、文藝は、只老熟すると云ふまでである。横にひろげることが出来ない。したところが愚なことだと思ふ。

(昭和九年三月)

### 天分と修業

誰でも自分の天分を過度に計上したがるものらしいですね。又自分の天分を忘れて人の天分を羨むと云ふこともあるらしい。

確かな先輩で導いてくれる人があれば自分の行けるところまで行けることは間違ひない。能は上手な人でも修業しないとどこか卑しい。俳句でも矢張りあると思ふですね。俳句なん

か目だたぬが能なんか目だつ。

(昭和九年三月)

### 拙なるが如く

俳句を作るに、拙なるが如くといふ心掛けは結構だと思ひます。拙なるが如くといふ言葉の中には悪く解釋すれば拙なることを銜ふといふやうに取れる處がある。が、それよりも巧者な言葉とか、言葉其者が光つてみえるといふ種類のものには、運ばふとする心持なり景色なりが蔭になつて了つて只言葉のみが浮動してゐるやうになる。さういふ上つらの句がとかく初心者や若い者を喜ばす傾がある。けれどもそれは少し老成した者になるとその言葉に反感が起つて受けけない。強て言葉の拙なることを銜ふ譯でなくて、一の詩を作り上げる自然の欲求から來るのである。俳句といふ文藝はもと／＼簡單素朴を生命とする文藝である。「拙なるが如く」といふのは俳句本來の面目であるといつてよからうと思ふ。が茲にも亦<sup>い</sup>の<sup>け</sup>が<sup>ない</sup>ことも



ない。それは巧な氣のきいた言葉が内容としつくり彼つてゐて、その言葉でなければその情景が現せないといふやうな場合は是非とも巧な氣のきいた言葉を必要とする。絢爛な言葉によつて初めてその内容を運ぶ効果があるといふやうな場合がないこともない。ホトトギスにあつても若い諸君には往々かういふ傾向を見出すのである。この一面のあることを忘れてはならぬ。句を作るときに言葉ばかり働いてゐる句が出来る、さう云ふのは出来損ひですね。心持としつくり合つた場合の句は面白くなる。若い人は言葉に刺戟され易い。

(昭和九年四月)

## 月 竝

子規が、天保時代から後の俳風を輕蔑して月竝と言つたのです。宗匠が毎月月竝に會をやるところから、宗匠の如き俗惡な句は月竝調だといつた。それから起つたものです。だから俗惡、低調、陳腐といふやうな意味があつたんです。ところが、其の後漱石が猫の中で此意味を

解釋しましてね、ありふれた事、普通な事、陳腐な事、即ち月竝と云ふ字義がもたらす意味としたのです。子規の使つた意味とは廣狹があります。今日では多く漱石の解釋した意味に使はれてゐるやうです。

(昭和九年四月)

## 子供に自然の美を與へる

大人の俳句に對して子供の俳句といふ特別なものはないですが、只かういふことは考へていない。子供は俳句で吟詠するやうな自然の趣を知らない。——それは大人でも同じだが——子供にその自然界の興味をなるべく知らしめる、美育といふやうなものです。いゝ句が出来ることよりもその方面を考へて導いてやらねばいかぬと思ふ。

俳句を作るやうになつて自然界の美を知るに至つたといふことはその人に取つて幸福ですね。俳句によつてさう云ふ自然界に親しむことを教へるのがいゝ。



(昭和九年四月)

島村 元

古いところで我等の友人といふやうな人はさて置いて、後進といふ側で最も親しく私が手を取つて教へたといふやうな人は島村はじめだつた。これは親父さんから頼まれて俳句を教へてくれるといふので……常人も病氣の爲に學校を止めてから俳句に打ち込んだですね、家には相當の財産があつて窮さない人でしたから俳句を専門にやらうといふ氣が起つたのです。私もさういふ風に親父さんから依頼されたから相當に身を入れて導いてゐました。ところが頭もなかなか俊敏で、立派な作家になるだらうと前途に囑望してゐたです。不幸にして一緒に雲仙に遊んだのがもとで病氣になりましたね……。其が最も残念で痛惜の念に堪へなかつたです。それから原月舟——これは天分があつたのかなかつたのかまだ分らなかつたですが然し相當な作を残して居ります。なか／＼研究的態度があつたですね。

元君なんかは實に俳句には渾身の勇氣を揮つてゐましたよ。確かに豊かな天分がありましたね。

(昭和九年四月)

修業時代の長いのは仕合せ

子規が健在の時分には子規の選を正しいものとしてゐました。子規の選に反對するといふやうな氣は全く持たなかつたです。暢氣な氣持で唯俳句を作つてゐました。

頗る暢氣だつたです。子規がこんなことを言つたことがあります。もう少し氣取つたらいいぢやないか、餘り子供らしいと言ひましたね。併し私は其子規の言を問題にしなかつたです。私なんか作つた句を書きとめる事もしなかつたですからね。散逸するに任せてゐたです。俳句界の自分の地位など考へもせずゐた。子規が死んで了つてから初めて自分でどうかしなきやならぬと考へました。俳句は素より寫生文ですが。この寫生文は緒に就いたばかりで、まだ



海のものとも山のものともつかぬ。この儘打棄て、しまふことは出来ぬ。今少し此方面を研究してみたいと思ひましてね。私と志を同じうすると言ひますか坂本四方太これ等の人と寫生文に力を盡してみようといふ考を起しましてね。それから碧梧桐が俳句に熱心だつたから俳句は碧梧桐に任せて自分は文章の方面に力を盡して見ようと思ひました。文章の傍ら私の作る俳句に碧梧桐は相當の諒解を持つものと思つたが碧梧桐はなか／＼鼻息が荒かつた。私なんか眼中に無かつた。二、三年間俳句に遠ざかつてゐる間に碧梧桐は地方を廻つてゐましたが俳句界の不平が随分多かつたです。私が主として文章に赴いた爲に去就に迷つて俳句をやめた人もあり、碧梧桐につく人もあり、又沈黙を守る人もあり、それ等の人から頗りに私のところへ言つて来る。さうかうしてゐる間に身體を悪くしたから暫く文章を休み鎌倉の病床にあつて又俳句に親しむやうになつた。さうして其頃になつてはじめて子規時代のやうな親がゝりの暢氣な氣持ちではゐられないことに氣がついた。詰り晩熟の方ですね。

文藝といふものは自分を立てるより外に道はないもんだと思ひましたね。判り切つたことだが。

## 女流作家

自分より先に立つものがあるときは、それを信頼してそれに随ふことになります。其間が修養時代です。修養時代の長い程其人は仕合せです。私でも子規に確かに養はれました。自分の力のやうにも思つて居るが矢張り子規から受けたものは多いだらうと思つて居ります。

(昭和九年四月)

女流作家はかな女、はぎ女等が始めです。はぎ女は男か女か分らんでした。美濃の中津川に成木蝶哉といふのが井戸端會といふ會報を寄越して地方俳句界に出てゐましたが、その中にはぎ女といふのがあつて蝶哉の細君かと思つたです。私が蝶哉に逢つたときはぎ女は私の家内ですと言つてゐましたが、あれは影法師だといつてゐる人もありました。

それから富女といふのがあつた。加賀の金澤の人で竹村秋竹の下宿してゐる家の娘でした。「我戀は林檎の如く美しき」なんかと云ふ句を作つて其時分まだ若かつた我等仲間を騒がせて



みました。多少秋竹が修正したかもしれぬが。ともかくも富女、はぎ女、續いてはかな女などが古い方ですね。かな女時分からそろ／＼女流作家輩出の氣運が向いて來ました。

牛込の船河原町のホトトギス發行所で第一回の女流俳句會をやりました。かな女、茅花女、みさ子、すみ女、眞砂子そんな人達が其時集りました。

(昭和九年四月)

### 題の好き嫌い

句會の節出された季題の中でこの題はどうしても出來ないといふのがありますね。

又或一題にひよつと興味が乗つて比較的澤山出來るやうな場合があります。けれども大概五題出てをるものなら其うち三題四題或は五題共作りますね。

私は題の好き嫌ひは比較的少ない方かもしれぬが作りよい作りにくいはありませんね。

もと／＼題を澤山出すのはかう云ふつもりなんです。人によつて作り易い題と作り悪い題と

がある。澤山出せば適當な題を撰ぶことが出来る。その便宜の爲です。修養の爲からいへば、どんな題でも一應こなすことはいゝですがね。

(昭和九年四月)

### 新題

諸方でこの頃新題を好んで出しますね。この頃歳時記が出來て新題が多く載つてゐるが少し吟味しないと餘り價値のないものもある。新題は少し吟味して篩にかける必要があると思ふ。

(昭和九年四月)

### 雑詠

雑詠といふのは全く私が始めたものです。はじめは課題句を募集してゐましたが、多くの入



の便宜を思つて題を限らず雑詠としたのです。

雑詠の初まりは水巴、爲王なんか原稿を送つて来てそれを私が選をして返してゐましたが、その中から雑詠に出しました。

雑詠の初めは一人五十句だつたです。

雑吟と言つたこともありましたね。

ホトトギス雑詠といふものをかういふ風に考へてゐる。こゝは俳句修業の道場であつて、俳句の展覽會場ではない。展覽會場と考へると句作の道場と考へると少し違ふと思ふ。殊に新進作家が輩出して来る場合如何にしてこの新進作家の特色を發揮せしめて一人前の作家に進めることが出来るかといふことに相當に意を注いで居る。

一生懸命にぶつかるといふこと。それは私に限らない。誰でもいふ。その人にぶつかるつもりで行くといふことがいふ。

(昭和九年四月)

## 選句

句會で、私の選ばかり尊重しないで諸君同士の選をもつと尊重して貰ひたい。諸君の選は諸君各々の風格趣味が伺はれる。尤も伺はれないものもあるが。其を伺ふのも面白いし、又誰それはこの句を取つたがなる程尤もだと著眼するところもあらうし、互に人々の選句をも少し注意し翫味する必要があると思ふ。

諸君の選といふものに對する考がもう少し慎重であつて欲しい。少しぞんざいだと思ふ。

廻つて来た句稿に自分の句があるかないかを見てつゝと次へ廻はす、極端に言ふとさういふ人もある。早く廻すことも必要だが見方がぞんざいですよ。

それかと言つて長く見てゐるのがいゝ譯ではない。句稿を廻すのが後れるのは困る。唯注意力が肝要です。

十人か十五人集つて、後で選句の批評をやるといふですがね。以前はやつてゐましたが。



この頃は會が多くなつたから……一つ句會で批評をやるといふと全部の句會で批評をやらなくちやならないから。

草田男君の書いてゐる「且作且評」あれは興味本位であれでいいですよ。間違つてゐても構はんですよ、あゝいふ風のものは、讀者には興味があつて愉快なんでせう。

私も譯君の選を参考にする時があります。自分の句は作つた當座は分らないことがありますよ。この句は出來たなと思ふ句が諸君の選に入らない。考へて見るとなる程かう云ふところに缺點があるのだと思ふことがあります。

この句を採らぬのは皆が分らないだと思ふやうなことも稀にはありますが。

(昭和九年四月)

### 自分の主観を働かせ過ぎる

私が人の句を選むときに、自分の主観を働かし過ぎて思ひやりがあり過ぎるといふ説がある

が、それは首肯しない。けれど作者の意識しないであることを私が解釋してゐることはあるでせう。「選は創作なり」といふのはそのことですよ。

(昭和九年五月)

### 國民新聞社にゐた

國民俳句は明治二十九年頃から始まつた。随分古くから携つてをつた。其後ち吉野左衛門が國民新聞の政治部長をしてゐまして、社會部長を兼ねてゐましたが、繁忙でやり切れないので、其社會部長にならぬかと私に勸告に來たが、私は任に非ずと言つて辭退しました。其時分に若し文學部を設けるのならやつてみてもよいと言ひました。其翌日早速來て社長がよからうと言ふからやつてくれ、文學部を私に一任すると云ふ話でやることになつて毎日國民新聞社に通つて文學部を作つたです。其爲め多忙なもんだから俳句の選は東洋城に代つてもらつた。あの時分は兎に角面白く仕事をしてゐましたね。其に刺戟されたかどうか朝日新聞にも文學欄



といふものが其後一年ばかりして出来たのです。兎に角國民新聞の文學欄と云ふものは其頃目立つた存在だつたらしいです。

國民新聞にゐた二、三年間は私にいゝ經驗を與へましたね。

「俳諧師」のやうなものを新聞に載せたのは蘇峯先生が私を諒解してゐてくれた爲でせうね。先生に感謝しなくちやならん。

蘇峯翁にも俳句が一句あるとか聞いてゐます。

股 火 して 天 下 を 論 ず 火 鉢 かな

そんなやうな句が一句あるといふことを聞いたことがあります。

國民新聞には二年位——足掛四年位ですか、たしかな事は忘れましたが、其時分は雑誌に手を出す餘裕が無かつたものだから「ホトトギス」はぐんぐん減つて了つた。

(昭和九年五月)

## 新 月 竝

今後新傾向のやうなあゝいふ風な計畫的のものは出てもたいした影響はない。自分が作つてゐるうちに、或る道を進みつゝあるうちに、豫期しない變化が起つて來ることがある。豫期しない變化は力強い。

私の死んだ後は必ず月竝が起ると思ふ。一方に月竝でない人もあるでせうけれど一方に月竝の俳句が大手を振つて俳壇を横行する時が來ると思ふ。

私が主觀を押へて居るがそれが大手を振つて横行するでせう。私の生きて居る間は大手を振つて横行はしない、させないつもりだ。私の死んだ後は反動的に一度は大手を振つて横行する時代が來るであらう。

又徒に議論い横行する時代は作は振はないですね。

(昭和九年五月)



## 師弟關係

文壇で師弟の關係の正しかったのは紅葉でした。紅葉は三尺去つて師の影を踏まずといふやうにやかましかつたらしい。

紅葉はあの時分文壇の寵兒で、日本の文壇は硯友社の文壇と言ふてもいゝ位だつた。子規と私達なんかお前があし、がと言つて同輩のやうに言つてゐたけれども、自然心持で尊敬してゐた。子規も亦たその心持だつたらう。子規の仲間の間にも師弟關係が自ら保たれてゐた。その時分にはその他にもあつたか知れんが、後になると亂れて來た。

(昭和九年五月)

俳句が他の文藝の眞似をするのはいけな

俳句には俳句の分野がある。俳句が他の文藝を眞似ると云ふことは無意味な話ではありませんか。

小説家等が俳句を諒解しないことを不平に思ふのは愚かな話で、小説家が諒解し得ないところに俳句の誇がある。一茶の句なんかあゝいふ主觀句は一般文藝家にわかり易いやうですね。

(昭和九年五月)

奥に漂ふてゐるもの

隠れたる味ひ、上つらは詰らぬことが言つてある、こんなことは何でもないと考へる人があつるが、よく吟味してみると詰らぬことでない、詰らぬことが言つてあるけれども、よく吟味してみると或る大きなことに觸れてゐる。其大きなことに氣がつかぬから其句は詰らぬといふのです。文章でも同じことです。或ることを書く爲に叙することはほんの一片を叙する。その一片を讀んで隠れたる大きなことを窺ふことの出來ない人は本當のその文章の面白味を解せ



ない人と言つていゝと思ふ。

併し表面の描寫がうまくなくては所謂其奥に漂つてゐるものが現れない。描寫の必要がそこにある。描寫の必要は文藝にどこまでもつきまとつてゐる。「藝術は技巧なり」といつたのはその點で、技巧はどこまでも大事である。然し文藝の重點はどこまでも内にある。

(昭和九年五月)

### 俳句の質問に答へなかつた

私が文章の方を熱心に遣つて見ようといふ考が旺んになつたのは三十五、六歳といふ年であつたと思ふ。それ迄にも寫生文といふものには相當に熱を持つて居て、詳しいことはホトトギスを開けて見たら分るのであるが、明治三十六七年といふ年は私が三十歳、三十一歳といふ年であつたが、其時分は俳句、寫生文を並び研究して居つた時代であつた。其時分は碧梧桐と俳句の意見の相違を來して居なかつた時分で、又、私は別に俳句統率者にならうといふ野心も持

つて居なかつた。只自由な暢氣な心持で俳句、寫生文等の研究に携はつて居た。人の句を直すとか選むとかいふことは随分うるさい事であつて、さういふ事に携はることは元來が好きではない。それで碧梧桐が「日本新聞」で選をして居つたから、泊雲君に、私に俳句を見せるより「日本新聞」に投句したならばよからうと言ふことを勧めたものであらう。又、泊雲君に俳句の質問に答へなかつたこともあるかも知れないが、其時の心持も大概振り返つて見て見當が附くやうと思ふ。さういふ事よりももう少し他に遣り度い事があつた。そんな意味で自然々々その返事もしなかつたものであらうと思ふ。

(昭和九年六月)

### 昔の吟行と句會

吟行といふものをはじめたのは新しいですよ。以前の吟行は景色に直面して寫生するといふ方法は取らなかつた。吟行に類したことは遣つても景色は寫生しないで題を出して作つたもん



だ。

會て子規居士と一緒に歩いて「鍋さげて田螺ほるなり町はづれ」といふやうな句を作つた。

あれは俳書を携へて、其俳書を読みながら句を作つて歩いたのですね。

其頃の句會では人が少ないから席上で議論もし雑談もした。鳴雪翁と子規などは俳句そつちのけで議論をしたこともある。とにかく時間がゆつくりで、それに極く少人数で、作る時間が

長いから自然馬鹿話をする餘裕があつたのです。

子規の家ではじめて蕪村忌をやつたとき二十人集まりましたが、それが空前の盛會と云つた位です。一寸會をやるといふときは七、八人でしたね。

俳句を作る人も少数で顔が極まつてゐました。例へば會をやるといへば俵屋に手紙を持たせてやつて召集する、そしてその俵に乗つて來るといふ風でした。

子規が病が少しいゝといふので私の處へ俵に乗つて來て臨時の會をやることになつて、俵屋に手紙を持たせてやつたが鳴雪、四方太、碧梧桐、露月等皆家にゐて大概來ましたよ。

急に御馳走をすることになつたが、女中も居らぬし、その頃は八疊と四疊半と三疊との狭い

ところにゐましてね、狭い臺所で家内がバタ／＼用意する……闇汁といふものを初めてやつたので、皆めい／＼買ひに出掛けて行つて……その時の記事が子規の文章にあります。

(昭和九年六月)

## 句の道

この頃の若い人には先輩の句が澤山あるが、以前は先輩といふものが餘りなかつたんで、古人の句を研究するより外に道が無かつた。

何遍もやめようと思つたとはそりやまあ實際の話。俳句に限らず人生の事何でもさうですよ。

雑詠が出來てから今日迄随分長い間ですから比較的沈滞した時代もあつたでせう。

皆少し偉くなると段々離れてゆく、箱の皮のやうに。

私のあとには前にも言つたがいろ／＼の意味の月竝が起るだらうと思ふ。けれども必ず又それ打ち勝たうとする運動も起るでせう。一度は月竝が起るがそれには我等仲間の人が必要



ふだらうと思ふ。又必ず勝利を占めるだらうと思ふ。

(昭和九年六月)

## 花鳥風月

花鳥風月を動機といふのも目的といふのもさう切り離しては考へられない。動機になることもあらう、目的になることもあらう。其で少しも差支ない。感情があつて花鳥があり、又花鳥があつて感情がある。花鳥に重きを置くけれど感情がなければ詩にならぬ。

花鳥風月は自然現象のみでない。人間のことも含んで居る。四季が影響する人事は花鳥風月の中に含んでをる。凡てそれ等を含めて花鳥の二字に代表させてをる。それは何遍も繰り返して言つてをる通りだ。

一個の瓜でも一羽の鳩でも畫く人が立派なら輕蔑すべきでない。小さいものを描いた俳句で

も立派なものがある。それを諒解しないのは哀むべき人だ。

それから草の芽を寫さねばならぬと思つて寫生して構はぬ。その時分に、其草の芽を受入れるこちらの感情が立派なものであればいゝ。其対象物と感情とは切り離して考へらるべきものでない。切り離して考へやうとするところに錯誤がある。我々が實際句を作る時分に自分の感情がどうかうのとは考へてゐない。實際の景色に當つて見て感情が動いて句が出来る。これを感情がもとで景色があとから來て句が出来るといつても同じことだ。唯その順序をいへば昔は感情が先で景色が後であつたのが今は景色が先で感情があとになる傾きがある。句の出來た時は同じことで景色と感情とがひたと結びついた時だ。

(昭和九年六月)

## 技巧といふこと

文章でも俳句でもその思つてゐる感じを人に傳へるのに成るべく平明にわかり易く、只何げ



なく受け取らすといふことが一番必要だらうと思ふ。何気なく受取らす、説明しないで自然に受取らすことが一番必要だと思ふ。

説明其ものが面白い場合は別ですが、感じを説明すると反感が起る。それでなしに何げなく知らず、そんな風に俳句でも文章でも作り度いのです。

何回となく書き直すといふこともよからうが、併し興味の乗つた時分はひとりで出来上つてゐますね。

氣品ある作品、それはむつかしいナ。その人の品性にも因るだらうし又習練にもよるだらうし、いろ／＼なところから来る。極く下品な題材を描いたところで腕が冴えて居り頭がよければ氣品ある畫も句も出来るだらう。

(昭和九年七月)

### 不幸といふこと

生れつき不幸の人と幸福の人とがあるがそれは側から見ての批評で、自分の境遇を何事も幸福と考へる人もあり、又自分の境遇を如何にも不幸と考へる人がある。

私は所謂浅い幸福の人ならうが、其で結構だと思つてゐる。

矢張り或時——人生の或時が貴いですね。人生の或時は後の時代になつていくらもがいてももう追附かないですからね。あの時分にこんな事があつたが今は出来ない、それは後になつて判る。作品でも或時代のもは或時代でなければ出来ない。よかれ悪しかれ或時代は貴い。常にさう意識するがい。

(昭和九年七月)

### 口授

私の文章は時々鉛筆で多少下書をして置いて其を口授することもあるが大概いきなり口授するのです。文章の妙は落筆の間にあるといふのが蘇峰先生の主張で何もかも自分で書かれる。



本當はさうなんかもしれんが。

字が下手で書いて居るのが乙構だ。口授は石鼎の居る時分からだから大分古い。是迄に筆記する人が大分變つてゐる。

石鼎、青峰、宵曲、それから一水、たけしなんかもやつたな。此頃は夢香、東子房なんかやつてくれてゐる。

以前の小説の時分はさうぢやない。あれは大概一回宛自分で書いて、午後に新聞社に届けたものだ。鎌倉から来る汽車の中で書いたこともある。

(昭和九年八月)

## 酒

以前酒を飲んだ時分はよくしゃべつたやうに思ふ。こんなことがしゃべれたかしらと思ふ位しゃべれた。只酒が言はずんですから何を言ふたか覺えないが自分でも大變うまいことが言へ

たやうな氣がする。酒の爲に言葉が出て来て何を言ふといふでもなく思ふやうに言へる。字を書くのでもさうで、その時分は字を書く爲に酒を飲んだ。それで腦溢血になつたやうなものだ。

(昭和九年八月)

## 晩年の思ひ出に長いもの

晩年の思ひ出に一つ長いものを書き度いといふ考はありますね。併し書くとなると俳句もやめなくちやならぬ、何もかもやめなくちやならぬ。

今書けば前のやうなものでなく、もう少しいゝものが書けさうな氣がするが、どうだか。今でも文章専門になればもう少し氣の利いたものが出来るかもしれぬ。俳句の片手間ではね。

私はよくものを忘れる方だから、古い記憶は書けないかもしれんが、現在に起りつゝあることならば書けさうに思ふ。

(昭和九年八月)



後 繼 者

斯ういふことがありますよ。ホトトギスを私が始めた頃、「子規君が生存して居るうちはいいが」とよく人が言つた。子規が一旦亡くなつたらもうホトトギスは亡びるものと思つてゐたらしかつた。併し兎に角今迄續いて來てゐる。だからそんなに案じることはない。戦争に譬へていへば、大尉が死ねば中尉が代つて其位置に立ち、中尉が死ねば少尉が代つて立ち、チャンと共で軍隊は亂れずに戦ふ。世の中のこととは凡てそんなものだ。舊人が死ねば新人が代つて其穴を填補する。私が死んだら誰かゞ代つて私の代りに立ち其人が全責任を背負ふやうになる。又其人が責任を背負ふと、自分でも計り知らなかつた力を自ら發見するやうになる。

(昭和九年九月)

正しいか正しくないか

兎に角世の中といふものは常に反動の勢力といふものがくりかへし巻きかへし起つて來るものである。が、この勢力が強いものであるか弱いものであるかは、其所論が中正を得てをるか否かによつて決する。一時華々しく見えても正しい議論で無かつたならば決して長くは續かない。要するに正しいか正しくないかに據つて分れる。正しくない議論であつたならば直ちに又其反動が起る。

私は己に戦つて來たのだ。私の過去の俳話を見たらば其が判る。今新たに反對する人は僕の議論全體を見ようとせぬ。態と議論全體を見ないで、一部分をつかまへて曲解して反對してゐる。そんな議論は恐るゝに足らない。

俳句の歴史を振り返つて見ると主観偏重の時代は墮落時代である。少くとも客觀輕視の時代は墮落時代である。支麥時代、文化文政以後の如きがそれである。私達の次の時代が又さうい



ふ時代になるかどうかといふことを靜かに見てゐる。

それに、吾々の方のよい作品は、反對の側のものが主張するやうなものを持ちやんと含んでゐるどころではない。さういふものも吾々の中からはごくまれたものだ。われ／＼はそれを注意して育て、行く。彼等は其監督を窮屈なりとして、埒外に奔る。奔るのもいゝが極つて其等の人は昨日迄居た古巢の悪口をいふ。自分に信ずるところがあれば他の悪口をいふ必要はないわけだ。悪口をいふのは恐れを抱くからだ。一時は自由に自己の好むところに突進するのは愉快だらうが、早晚軌道を踏み外した時分に、はじめてわれ／＼の老婆親切が判るのだ。我が埒内にとゞまつてゐる人の中にも澤山の同じ傾向の人がある。唯其等の人は彼等の如く功名的でなく、焦躁的でなく、徐ろに進路を開拓してゐる。私も亦其等の人と共に充分の注意を拂つて其進むべき道を監視してゐる。何年かの後其等の人と彼等と何れが先になるか後になるか、それは實際の作品がよく證明する筈だ。

(昭和九年九月)

### 主観は貴といが客観の修業が第一

「怒濤岩を噛む吾れを神かと臚の夜」は明治二十九年か三十年頃であつたらう。私ははじめの頃は主観の傾向が多くつて、客観の敘述には不得手であつた。客観句を作るとは碧梧桐の方が旨かつた。それで例へば、「京女花に狂はぬ罪深し」「海に入つて生れかはらう臚月」そんなやうな夢を見て居つた。文章でもさうであつて、唯詩をさぐつて夢を見て居つた。それからだん／＼客観の研究をして、其夢ともいふべき心の磊塊は深く内部に沈潜せしめて、ひたすらに客観描寫に努力した。今でも主観といふものはどこ迄も尊いものと思つてゐる、主観が無ければ文學は無い。併し其主観を最もよく運ぶものは客観の具象である。客観の描寫のまづい、主観の暴露してゐるものは、文藝として價値が無い。さういふ信念に立つてゐる。

私は元來主観尊重論者である。唯其主観は客観の形態を具備したもので無ければ價値がない。これは特に俳句に於てさうである。が亦文章に於てもさうである。爰に於てか客観描寫と



いふ事は俳句文章修業上先づ第一の要件である。殊に俳句修業上の要件である。一通り客観描寫が出来るやうになつたらば、先づ一通りの作家になつたものであつて其上は主観の問題である。所謂文品の相違は多く其主観によつて極るのであるから、たとひ客観描寫のものであつても其作者の持つ主観の檢覈に入るべきである。これが私の修業道程であり又後進誘掖の目標である。取敢へず先づ客観描寫の手腕を習熟せねばならぬ。其手腕が出来た上で、あとは其人に應じて其々の道がある。

又兼々いふ通り主観の色といふものは隠さうとしても隠しきれぬものではない。客観描寫を習熟してをるうちに、其主観の鋭鋒は必ず尖端を現すものである。だから客観句を習熟してをるうちに知らず識らず主観の濕ひがにじみ出てゐるのである。主観傾向の強い人であつても客観の描寫に忠實な人であつたならば決して主観暴露の淺薄なる句を作らず、玉成した客観的主観句即ち客観の衣を著た主観句を作るやうになる。此域に達すれば主観即客観、客観即主観であつて、俳句でも文章でも先づ／＼堂に入つたものといふべきであらう。

(昭和九年九月)

### 子規の「俳句分類」

子規もよくさういふことをいつてゐたです、俳句分類のやうなこんな馬鹿げた仕事をやるものは僕の外には我等仲間には一人も無いと。

自分の貧しい俳書や大學圖書館に通つてやつたのが始めて、よく人から借りてやつたものです。

半紙一枚に二十句書いて、其が二十句以上になると又分類するといふことをしたです。

子規は字を書くことには苦勞がない。字が上手だつたから、書くことは平氣だつた。

小さい時習つたでせう。

(昭和九年九月)



## 大龍寺

子規の死んだ時分はあの大龍寺は湯島の麟詳院の末寺であつて、その時分麟詳院にゐた坊さんがあの寺に来てゐたのであつたやうに思ふ。その時の坊さんがあの人であつたかどうかはつきり記憶しませんが兎に角あの坊さんは日露戦争に従軍して歸つて来てそれからあの寺につけて居ることは確かと思ふです。それから麟詳院は震災の時分に焼けて了つて、それからは麟詳院の代りになつてゐる位の寺になつたのです。一昨日話してゐたのはあの坊さんが病氣であつて前日まで入院してゐたといふ話を聞いたものですからその病状をたづねたり見舞を言つたりして暫く話してゐた次第です。阿久津病院に入院してゐたさうです。五分間置き位に排尿があつたさうで、攝護腺炎といふ病氣で、その病氣は日露戦争時分に馬に蹴られてその爲に起つたものであらうといふ醫師の診断だつたさうです。然し幸によくなつて一昨日は法養を勤める位になつたのでした。

子規が死んだ時分何處かに葬らねばならぬと鳴雪と碧梧桐が探しに出掛けて行つてあそこを探し當てた譯です。子規の家は宗旨は禪宗であつたのですがあの寺は眞言律宗なのです。

(昭和九年十月)

## 高野山

「佛法僧」といふ文章は明治四十二、三年頃、「大内旅宿」を書いた時分だ。その頃は電車もなく高野口まで汽車で行つて、あれから歩くんだ。不動坂を登るのは苦しかった。

「月の坂高野の僧に逢ふばかり」といふ句は、不動坂は高野山の僧がよく下りて來よつた。まあ其邊の景色だね。

奥の院は夜通るとすごかつたね。あそこでむさゝびに逢つた。奥の院に燈籠——貧者の一燈といふのがある、あの前にお堂が



あるだらう、あのお堂に腰掛けて暫く佛法僧の啼くの待受けた。いゝ聲で鳴いた。實にいゝ聲で鳴くね。黄金の入つてゐる鉦を打つやうな聲だな。矢張り山鳩か郭公かの種類でせうか。

高野山は大阪の市街を山の上へ持つて行つたやうなものだ。

これは其後に行つた時の話だが、鯛が盛んに鳴いてゐた。鯛といふと高野山を想ひ出す。松が極めて高く伸びてをる、その松林に鯛が鳴いてゐる。

(昭和九年十月)

### 滅びるものは滅びるに任す

私は滅びるものは滅びるに任かす、そんな考が強いです。

遺したいといふ欲望が人間にはあります。それはそれでいゝ。けれども滅びるものは滅びるに任すといふ考が私には強いです。松山の正宗寺に子規堂がありましてね、寺が焼けたときに

同時に焼けて、今度又再建の話がありました。松山の俳人が主になつて出来ることになりましたが、私には諸君ほど熱心に再建の考はないんですけれどもさういふ考が諸君にあるのならばそれもよからうと賛成し聊か助力もしました。が滅びるものは滅びしめよといふ考の方が強いです。

段々人間といふものは滅びてゆく、あとかたもなくなる、それでいゝんだ。

「落葉降る下に」といふのを書きましたがあの時分からそんな考が強くなつた。

永田青嵐が一万年滅びない考から供養塔を高野山に建てたといふ、それは結構なことだが、私ならそんなことはやらないであらうと思ふ、それだけの話です。

(昭和九年十月)

### ホトトギス

ホトトギスの出た時分は珍らしいもんだつたですね。俳句ばかりでない、あゝいふ種類の雑



誌は珍らしかつたから一寸異彩を放つてゐた。

松山版は二十號まで出ました。松山では二、三百位でしたらう。東京では二巻として出して其一號が千五百出たです。

(昭和九年十月)

### 子規の句

子規もいろ／＼試みはしてゐましたね。いろ／＼な人の句を見て、其人の調を眞似する。古人の句も眞似をしてみるといふ風でしたね。子規の句には月竝が多かつたですね、そりやまあ止むを得ない。晩年四、五年の句が比較的いゝ句です。殊に死ぬる一、二年前にいゝ句が出来たやうな氣がしますね。明治二十九年頃一番澤山作つてゐるが割合にいゝ句が少ない。

晩年には俳句と和歌と兩方をやつてゐましたが、俳句の方では子規の議論を駁撃するものがなかつたが、和歌の方は辯難を試みるものが大分あつた。「八度歌詠みに與ふる書」なんか書

いて盛んに戦つたものです。

尤も子規の俳句は復古、新しい俳句の道を開いて行くといふより芭蕉蕪村の昔にかへすといふ方でしたね。終ひに寫生といふことを言つてそれが稍新しい運動だつたですね。子規が自分でも言つたことがありますよ、自分の俳句の仕事は復古に過ぎなかつた、文章になつて寫生文といふ稍新しいことをするといふ氣持があると言つてゐました。

(昭和九年十月)

### 俳句は昔も今も盛

俳句を作る人はいつの時代でも多いですよ。昔も同じじやないですか。大分前信州の温泉に行きましたら、按摩が来てゐてね、その按摩が宗匠で相當に弟子がある、弟子を率ゐてやつてゐました。そんなものが無數にある。今日では印刷業が盛んになつたからホトトギスが出れば買ふといふ譯で俳句を作る人が殖えたやうな感じはするが、俳句を作る人の分量は昔も今も矢



張り同じじやありませんか、さういふ心持がしますね。尤も智識階級の人に俳句を作る人の多くなつたことは確かですがね。

(昭和九年十月)

### 「寫生文集」

虚子全集に今度は「寫生文集」を編むについて古いものを見ると私の文章はまづいすね、滓が多いですね。

多くホトトギスに載せたものですが、自分で書いて自分の雑誌に載せるのだから切迫つまるさまづくても何でも載せる、さういふ関係もありますね。

「浅草寺のくさく」は寫生といふことに氣のついた一番初の作品で、まあ記念品ですね。

坂本四方太の書いたものは私のやうには滓が無いですね。

(昭和九年十一月)

### 坂本四方太

坂本四方太は滑稽が好きであつて、文章は無駄が無く、整然としてゐました。人間は極く正直な潔癖家でした。文學士で和田萬吉さんの下に大學圖書館の司書をしてゐました。

四方太は非力な男だつた。非力でよく憤慨してゐましたよ。漱石の文章にも不満で憤慨してゐました。

四方太がね、金がないのが不愉快だ、三萬圓あればいゝなどとききりに言つてましたね。體力が弱くつて従つて大きな仕事をするといふ勢力もなかつた。其で頭は透明で如何にも非力の男といふ感じでした。

肝臓か心臓かゝ悪るかつたやうです。四方太はいつも折目正しい著物をキチンと著てゐましてね、日和下駄を履いて往來を真直ぐに歩いてゐました。神経質の顔を少し痙攣させてヒヒヒと甲高く笑つてゐました。



鳥取人で、几帳面でしたね。私が四方太の家へ行きましたらね、天井を見てくれ給へといふ、見ると天井が新しくなつとる、これにいくら／＼かゝつたと言ふ。乏しい金で天井を替へてそれを非常に楽しみさうに眺めてゐたのです。天井板ですよ、其を新しい板に張り替へて、これで襖も替へるといいんだが……といつて眺めてゐました。

一べん落語を書いてホトトギスに載せました。小せんといふ——盲になつて死んだですが——落語家がそれを讀んで四方太を訪ねたらしい。四方太は、小せんがこの間訪ねて来たといつて話してゐました。この間の頃の小さんに逢つた節小せんのことを訊いてみましたら、不遇で死んだといふことでした。

私が小説がかつたものを書くのも不平でしてね、どこまでも寫生文で行かなくちやいかんといふ主張であつたでせう。又座談に巧みでよく話しよく笑つたが、畢竟淋しい感じの男でしたね。

昔ホトトギスに兩人合評の文藝評論を毎月書いたですが四方太がよく悪口を言ひ度がつて鏡花の悪口などを書きました。私はおつきあひに引張り出された傾きでして、君も何かを言へと

言ふので言ひはしましたが、要するに四方太の溜飲の下げ場所でした。何もかも癪に障るといつた男で、小さく自己を守つてゐるといふやうな感じがありました。

亡くなつたのは四十三四でしたかね。

漱石の「猫」が世の中で歓迎されたのも不平であつたらしいです。

私が四方太の最後の病床を見舞つた時でした、枕元の襖を細君が開けると、その開けやうが氣に喰はぬといつて細君を罵倒して「此お多福めが」とか何とか言つて怒鳴つてをつたが、私が「寫生文は世間が知らぬ風をしてゐるが、實際文壇を征服したといつてよい。教科書なんか殆ど近頃寫生文式になつたではないか」といふと、「そりやさうだ」といつて大に意を得たといふ風でした。寫生文を文壇が認めないと言ふのが大不平でした。「認めないやうな顔をしてゐたつて差支ないじやないか、實際勝利を占めてをれば其で差支ないじやないか」といふ私の態度も氣に入らなかつたらしい。寫生文が一番高尚なものでそれにも拘らず文壇が何も言はぬのは怪しからんと言つてました。それも非力な男が威張つてゐるやうで一才滑稽ですけれど、まあさういふ男でした。



鼠骨などもよく寫生文を書いたが、四方太程に熱中してゐるといふ風もなかつたですね。寫生文といつてもめい／＼違つてゐるのです。私は四方太の書くやうなものは相當に面白いけれども大して敬服もしてゐなかつたです。四方太も同じ事でしたらう。四方太が生きてゐたら私の此頃書くやうな文章に不賛成を稱へるかも知れませぬ。要するに何れもが發達すればするほど決して轡を並べて同じ方向へ進むきづかひはない。がお互に諒解があればそれでいい。

四方太が進めば落語とか何とかいふ方へ行つたかもしれん。

(昭和九年十一月)

## 狂言

落語といふものも面白いものですよ。

子規もね、落語が好きでした。その點四方太と似てゐますね。子規がよく落語の話をして、

お前なんか田舎者で落語の面白味はわかるまいと言つてゐました。

現在の小さんの師匠の小さん、其又師匠の小さんを子規は感心してゐましたよ。それに圓朝や圓遊の話もよくした。

お能の狂言は實に面白い。今の文壇に出しても立派なものがある。狂言の面白味は私は推重する。落語の面白味も解してはゐる積りだが好きなものは少ない。

狂言もなかには詰まらぬものがあるが、總じて實に立派なものです。文章でもあゝいつた態度で書いたら面白いだらうと思ふ。それには人間が出来てなくちや駄目ですね。

笑が腹の底から靜にこみあげて来るやうながありますよ。

足利時代にはあゝいふ風に世の中を見なければならぬ止むを得ない事情もあつたものであらうが、今日の世相でも見やうによればあゝも見える。

第一問の抜けた鷹揚な大名なんか出て来るが、あゝいふのは今日にもさらにある。大名に限らずあゝいふ人間の弱點はさらにある。それを誇張してゐるのであるが、誇張と感



しない。その大名に親しみを感ずる。

狂言に和歌や俳諧がよく出て来るがそれは詰らぬ和歌や俳諧ですよ。

「つり狐」なんかは本當の狂言の面白味はない。

一概にもいへないが「やるまいぞ〜」といふ型の方が狂言の面白味はあると言つていゝでせう。

夫婦喧嘩には必ず亭主の方が弱い。

聲男の場合は舅が必ずやられる、娘は聲を最負する。

狂言を見た人は矢張り大名なんかですね。

近頃は座敷などでやることありますが、昔は無論能舞臺でやつたでせう。

要するに文化が進んで來るとあゝいふ滑稽を欲求するんじゃないかしら、都會人はさういふ方へ傾くのじゃないですか。

(昭和九年十一月)

### 慶弔の句

今までに随分慶弔の句を作つたですが餘り残つてゐない。手紙のはしに書いたものが多いので向ふでもなくして了つたでせうがね。

月竝にならぬ程度に作るのはむづかしい、寫生式でもいかんし……。

(昭和九年十一月)

### 人後に落ちない積り

私は元來主觀の傾向の多い男です。其が客觀に氣を止めるやうになつて今日になつたのですがね。

たとへば青畝、あれは主觀の人でしてね、あの人が主觀の方へ押し通して行つたら俳人にな



れなかつたでせうね。主観の多い人程客観の研究をしなきや……。客観の描寫をしてゐる間に自然々々に何うしても押へることの出来ぬ主観が出て來ると思ふです。さうして又平凡な人であつても主観の乏しい人であつても客観句は出来る。女子供でもですよ。所謂童心で行けば女子供でも出来る。客観句を作らすことは俳句の指導方法としてはいゝ方法と思ふです。先づ感情がある、それを詠ふ場合に季題による、その場合の季題はそのまゝに感情のあらはれである。

季題を面に被つて出る感情が俳句になる、季題を借りなくとも出る感情は俳句にならない。俳句といふものを一般文藝と思ふとんだ間違ひを起す。文藝のうちでも最も特殊の文藝である。若い人は俳句といふものにのみ接して、他の文藝を見ないので、俳句で何も彼も詠はうとする、出来無いくまでしようとする、其をするのには他の文藝による方がよいといふ其所の判別がつかないのである。尤も私も昔は今の若い人のやうな考を起したこともあつたが、併しそんなものでないことを早く悟つて今日に來たのである。さうして新傾向なども戰つて來たのである。新傾向などといふものが詰りさういつた若い人々の抱くやうな思想に根ざしたも

のである。私の所論などは年とつて意氣地が無いものゝやうに解する若い人があるであらう。俳句の機能も尤も大きく見度いのは多年俳句に携はつてゐる私としては決して人後に落ちない積りだが、併し事實をどうすることも出来無ではないか。俳句と季題とは先天的に切り離すことが出来ない運命にあつて、其宿命が俳句をして最も特殊な文藝としてゐるのである。狭い文藝だ。併し狭いだけ特異な文藝だ。

(昭和九年十一月)

## 壯士芝居

川上晋次郎なんか出て來て壯士芝居の起つた時分——高田實といふやうな役者が活躍した時代で高田が出た爲に一種の型が出来た傾きが無いでもないが、併し偉大な役者であつた。従つて一時は壯士芝居でなくば客が入らぬといふ位だつた。蘆花の不如歸なんかやつてね。今の歌右衛門それから今の幸四郎、さういふ連中が新派の向ふを張つて、神田の東京座で矢張不如歸



をやつた。歌舞伎役者が新派の眞似をするといふ、さういふ勢ひで、新しい劇の起る目醒ましい氣持は恰度寫生文が新しい使命を持つて立つのと同じやうな氣持だつた。又壯士芝居の寫生の行き方は寫生文と同じとはいへなかつたが、併し部分々々は似寄つた所もあつた。それで興味を持つて壯士芝居をよく觀てゐた。

(昭和九年十二月)

### 心持が滲み出て来る

この頃書いてゐる文章は只客觀の事實を去りげなく敘してゐて、其うちに段々ところらの心持を運ぶといふ書き方を心掛けてをる。大正時代に書いたものはさう行つてゐない。心持が滲み出て來るといふ風でなくて、心持を説明するといふ、兎角さういふ傾きになりたがつてゐる。其點の用意が今日から見ると不足である。

俳句でも文章でも文藝の極致は其所だと思ふ。何でもない事柄が敘してあるが如くであつて

其裏面に深い作者の心持が潜んでをる。さういつたところに到達するのが些くとも私の窮極の目的である。なまじい敘述が絢爛であると、其心持は隠れてしまふ、といふよりも事柄の方に興味を取られて心持はお留守になる、さういふ敘述は私は未だ到れりとは思はない。今迄書いた小説がかつたものは感じが到つてゐなかつたですね。これから書けばも少しどうかしたものが出來さうな心持がしますがね。

(昭和九年十二月)

### 信仰しろ

俳句といふものは一言で盡すことは出來ませんからね。

説明したいのですが説明出來ないですよ。又説明が下手なんだから、説明するのはむづかし

い。一言言つただけでもわかる人にはわかる。澤山の言葉を費したところでわからぬ人にはわか



らぬ。だから先づ信仰しろと云ふのです、その外に言ふべきことがないやうな気がするんだ。さういふと大變威張るやうに聞えるが修業の方法としてそれが一番大事なことと思ふんです。師と云ふものを信仰してかゝる、それが道を得る近道であらうと思ふですね。

今の多くの若い人にはそれが出来ない、他を信頼するといふことに不安を感じて、先づ自分を頼む傾きが強い。それが幸か不幸か分らぬですね。

私を信仰しろとは言へませんがね。併しそれに似寄つたことは言つたことがあるやうに思ふ。

近頃は輕薄で理窟ばかり言ふ傾向が強いが、次の時代が来ると又變るかも知れません。昔のやうに先づ理窟は抜きにして修練しなさいといふやうな氣風が擡頭して來ると思ふ。形を變へた信仰が起つて來るかも知れぬ。

(昭和九年十二月)

### 何ぞ大志無きや

この頃の俳人諸君のうちには俳句といふものを花鳥諷詠に限つたことが不満足だといふそんな説を聞くことがある。その議論を進めて行くと、この前も言つたことだが花鳥を借りずに花鳥を通さないで自由に感じを述べることも又俳句ではないかといふ議論になつて來ると思ふが、それは必竟新傾向なんかの主張と根底を同じくしてゐる議論であつて、遂に新傾向が到達したところまで行かなければその主張は實現されないことになりはせぬかといふことになる。で何方かと言へば私はそれ等の人に何ぞ大志なきやと言ひたいやうな心持がする。初めから大きな志を懷いて居れば俳句といふ小さい範圍の中に閉ぢ籠らないで、もう少し自由な大きな天地に飛躍することが出来るのである。さういふ自由な天地があるに拘らず俳句といふ狭い天地に閉ぢ籠つてそしてその俳句の中で自由な仕事をしようとする。やがてそれは俳句をぶち壊すのに終るのである。それは俳句の小天地で功名的な客氣に驅られた人々のすることであつて、



今少し大志があれば、さういふ踴躍とした狭い天地内の仕事としないで、初めから自由に宏大な天地にその驥足を伸ぶべきであらうと考へるのである。俳句といふものは十七字と季題といふものに強く束縛されて居る文學であるからして決してさう自由な仕事が出来ない形體のもではないのである。私が俳句は花鳥諷詠の文學であると言つたのは、十七字といふことと季題といふことから来る止むを得ない制限の下にある文學として自ら性質づけられたところのものであるとしてその特色を言つたものであつて、之は内にあつて俳人諸君にのみ言はうといふ考ばかりでなく、外に對して一般の文藝に對して俳句といふものは斯る特色のある一箇の特異な文藝であるといふことを明白に聲明して置かうといふ心持もあつて言つた言葉である。私は自己では常に一般の文藝界と俳句といふものと併せ考へて居る。俳句を考へる時には一般の文藝に對しての俳句を考へる、又一一般の文藝を考へる時には俳句に對しての廣い文藝を考へる。自然今までの經驗からさういふ立場に自分を置くやうになつて居る。そして一般の文藝に對して俳句といふものを考へたときには花鳥諷詠といふことが一番鮮明な俳句の特色であつて、一番確かな強い俳句存在の理由であると思へるのである。

(昭和九年十二月)

### 俳句はもとより詩である

中には花鳥諷詠といふことは分り切つたことであつて、それよりも俳句は詩であるといふことを強調せねばならぬといふ議論を稱へる人がある。俳句が詩であり文藝であるといふことを自明のことであつて、今更事新しく説く必要もあるまいではないか。唯其詩の中で花鳥諷詠詩であるといふことを忘れてはならぬといふのである。

俳句が詩であり文學であるといふことは正岡子規あたりが説いたことである。今更そんなことを彼れ是れ言つてをる時代ではない。唯日本文壇に俳句といふ特異な詩が存在してをる、それは花鳥を諷詠する詩であるといふことを聊か俳壇の人又一般文壇の人に警告を與へる積りで言つたのである。——詳しくは虚子全集中の俳話集を精讀され度い。

小説戯曲と云ふ如きものは人間を描く、俳句といふものは小説戯曲の類が人事を描く如く花



鳥を描く、しかも是等の文學は皆作者の感情を土臺としてゐるものであるといふことは共通の性質である。俳句といふものを特色づけようと思へば花鳥の二字を削除することは出来ないではないか。俳諧四百年の歴史を振り返つてみても事實がよく之を證明するのであつて、花鳥即ち季節を通さなければ作者の感情は之を現すことが出来ない文藝が俳句なのである。

そのところをよく考へて花鳥即ち四季の現象に最も重きを置いた文藝として立つて居ることを十分に覺悟をしてその範圍内に歩を止めるやうにしないと遂に俳句でないものを作り上げて新しい仕事をしたといつて得意になつてゐるといふ様になる。股鑑遠からず新傾向がさうであつたのである。私がある前車の覆へるのを見た爲に常にこのことを強調して俳句の範圍に踏み止まることを注意して居るのである。徒らに退嬰を事として居ると解釋するのは誤りである、所謂俳句の新開拓を試みて居る人々には喜んで應援を惜まないものであつて、ホトトギスが常にその新開拓に力を貸したといふことも今までの事實が之を證明して居るのである。が然し乍らどこまでも俳句である。埒外に踏み出すことは大いなる眼をもつて之を監視してをる。さうして中堅に在つて所謂俳句の大道を歩いてゐる句を推量することも常に忘れないで居る。

(昭和九年十二月)

### 「俳諧須菩提經」

ホトトギスの雜詠が陳腐な句、平凡な句が多いといふ非難を聞くこともあるが、其陳腐な句平凡な句と見えるところのものも、決して陳腐平凡ではないのである。仔細に吟味すれば一點新しいところのものを發見するであらう。唯彼等が經驗の少ない大ざつばな眼を以て之を見る爲に識別することが出来無いまでである。且つ詩人を以て任ずる若い人々が自由にその自ら詩であるとするところのものを作つてをるのは差支ないのであるが、さういふ人の作のみが俳壇に跋扈することを許さない。若しさういふ時が來たならば、忽ち極めて狭い又極めて陳腐な——私は敢て陳腐と言ふ——鼻突合ひとなつて了ふであらうと思ふ。俳句といふものは詩人でない謙遜してをる人々も亦詩に遊ばうとするそれ等の人々の要求をも充たすところのものである。之が昔から大衆の藝術として存在して居る俳句の一特色であつてその大衆藝術といふこと



も亦苟且に考へることは出来ないところのものである。其大衆を常に正しきよき方向に導くと  
いふことは決して易々たることではないのである。

かういふ意味のことは「俳諧須菩提經」といふものに書いたことがあるのであつて、それは  
随分古い話であるが今でもその考に少しも變りはない。さうはいふものゝ雑詠欄は創作の欄で  
あつて決して陳腐平凡の句を喜んで採るといふ譯はないのである。清新雋永の句は固よりのこ  
と陳腐平凡に似た句であつても一點新しいと認めるところがあつたならば喜んで之を採用する  
のである。

(昭和九年十二月)

## 願 句

曾て雑詠の類句をホトトギス誌上に發表したことがある。之はさうしたことをしらべるのが  
得意な人もあつたやうであるからそれ等の人々の勞に酬ゆるつもりで發表したものであつた。

さうするとあとからくと數多く出て來るので非難好きの世間の人々は之をホトトギス雑詠の  
非難の好材料として喜んだ。然し乍ら斯ういふ類句の續出して來ることは昔からあることであ  
つて今に始まつた珍らしいことではないのである。一々自分の採つた句を記憶してゐられるも  
のでもなし、そんな些少なことに頓着してゐては到底大きな修業道場としての雑詠欄をやつて  
行くことは出來ない。曾ても言つたやうに雑詠といふものを餘處行な展覽會場と心得てはなら  
ぬ。之は俳句の修業道場であるのである。

(昭和九年十二月)

## 洋行をするかせぬか

私もかね／＼一度は西洋にも行つてみたいと思つては居りますが段々年を取つて來て一月餘  
りの船上生活の事を思ふと一寸億劫になりなかく思ひ切りが惡いのであります。友次郎が  
巴里から歸る前に或る船で出掛けて行つてその船がマルセーユに着いてから英吉利の船渠に這



入つて居る間が凡そ四十日位で、歸りに又マルセーユに着くといふことを聞きましたから、乗つて行つた船に乗つて歸る位の時日で西洋を廻つて来て、友次郎と一緒に歸つて来るのもよからうかと考へて、丁度この間出船する前に發行所に見えた箱根丸の機関長の上ノ畑楠窓君にこんな考も持つてゐるのだけれども果して實行が出来るかどうか怪しいものだと言ふ話をしたところが、楠窓君は大變賛成をしてそれは是非箱根丸に乗つて行つて貰ひたいとの事で、丁度此處にペナンから出した同君の手紙が来て居りますが、それには日程から携帯荷物の事迄詳しく書いて來てゐる、それに雜詠はかく／＼の工合にして選句をしてどこそこから發送すれば雜誌の締切に間に合ふ都合だといふ事まで詳しく言つて來てくれてゐます。この船は五月中旬に往航の途に上るのださうであるがさう早くは無論行けないからたとひ行くにしても箱根丸といふことは實現出来ない問題であると考へるのであります。行くとなれば先づ今から一年先のことであります、果して行けるかどうか周圍の事情も分らないし又私の心持もいよ／＼行つてみようといふ考になるか又億劫だといふことになるか、さういふことは全く分らないのであります。只行く位なれば友次郎の居る間に行つてみるのがよからうといふやうな考は持つて居りま

す。

凡秋さんの奥さんが巴里に行つてゐられてパン屑と鹽にビールを入れて糠味噌を作つたといふ、さういふやうな風に日本から行つた人々の嗜好に適するやうないろ／＼な料理を拵へて下すつて日本人が皆凡秋君のところに集まつて行つたといふことを聞いたことがあるのだが、さういふやうな人が居れば巴里に行つても容易い氣がする。船の中は日本の船だから氣儘だが、マルセーユに上陸してからは日本食にありつきにくいからそれも困難なことの一つであります。日本料理屋があるさうだがおいしくもないさうだから……。

さう／＼七、八年前にも洋行の話があつた、その時分は雜詠のこともあつたし周圍の人も止める人が多かつたのであつたが今度は周圍の人は皆行つて來るがよからうといふね。楠窓君の如きは「まさに天の時と地の利と人の和とを得たるもの、かくの如き絶好の機はこれなかるべく云々」と言つておだてゝ來てゐる位であるが、行くといつたところで別に目的があるわけではなく只遊んで來るといふだけのことであるから、行きたくなくなれば行かないまでのことだ。自分ながら當てにならない話だね。



花鳥諷詠を説きますかね。

西洋に行つて話すとなると、近頃の若い人の説くところはそれは西洋の受賣りだから西洋人には陳腐だ。花鳥諷詠の方が新しいだらう。佛蘭西には變挺子な俳句、何か理窟めいたものがある。

楠窓君から言つて来てゐるが雜詠選を休まないでもいゝさうだ。

休むか、でなければ誰かに代つてやつて貰ふのだね。

通譯には佛蘭西大使館にゐた武官で大變日本語のうまい人があるとか友次郎の手紙にありました。

136

行つてみたいやうな氣持もあり、億劫なやうな氣持もありだ。

行つたらもう歸らぬかもしれぬ。

田舎は面白いらしいですね。

兎に角探勝會が押し出すのだね。

ハイデルベルグでは素十君の下宿のお神さんにも逢つて。

久しく佛蘭西にあつた、佛蘭西人を母に持つ、半ば佛蘭西人である山田菊子が其佛蘭西から歸る時分に武者小路の兄さん、今大使になつてゐる、あの人なんか一緒に僕もハルビンから歸りに一緒になつたが、京城の停車場に澤山の俳人が見送りに来てゐたので菊子がそれを見て大變驚いて、いかなる大官の見送りかと思つたら其は文學者の見送りであつた、日本の文學者の往復する時分にはあゝいふ風に送り迎へのあるものか、日本の文化も進んだものだとか菊子の佛蘭西の新聞に載せた紀行文に書いてあるといふことを聞いたが、外の人から見たらそんな風に見えるんだね。

(昭和十年三月)

137

### 天明時代の句

蕪村句集講義とか几董句集とか太祇句集とかいふのは明治三十二年頃に出しました。

几董句集とか太祇句集とかいふのは、もと木版本がありました。それを分類翻刻したので



す。

寫生といふことも天明の俳句に教はつたところがありますよ。

天明時代のいゝ句を読むのはいゝですね。

「霧の中大きな町に出でにけり」これなんか今の俳句みたいだね。又楞良の句なんか平凡なやうで趣の深い句がある。

(昭和十年三月)

### 守 舊 派

旭川の俳句大會の時分にも私は

「私は矢張り守舊派である」といふことを述べたのである。それは新運動の起る度に常に私は守舊派であるといふことを言つたのである。

先づ初めに碧梧桐などの所謂新傾向運動が起つた時分に私は守舊派と稱してこの俳壇を守る

ことに努めた経験がある。それと同じことで今の若い人々には私達から見て俳句に非ずと思はるゝところのものを尙俳句なりと稱する人々があるやうに見受けるが夫等に對して、如何にもうるさい面倒なことではあるが、守舊派といふ旗でも再び打建てねばなるまいかと考へて居る現状である。

(昭和十年四月)

### 自然主義の影響

さうですね。新傾向ははじめは季題はまだ存してゐたが遂に季題もなくしてしまつた。何が動機でさういふものを作りはじめたか分りませんが、要するに何か新しい仕事をしたいといふ考が強かつたのでせう。兎に角新しい仕事をするのはよいが同時に以前のものを攻撃する、さうしなくちや自分のものを世に認めさせることが出来ないでせうが、それが破綻のもとですね。



新傾向の盛んになつたのは大正の初め頃かな。

新傾向と稱へてゐた初めは非定型ではなかつたです。恰度此頃騒いでゐると似てゐますね。それから井泉水が季題のないものを作りはじめました。それで遂に碧梧桐も季題なしのものを作るやうになりました。

ホトトギスに字餘りの句が汎濫したといはれるのも大正四五年頃ですかね。其時分克明な觀察と描寫といふ點から寫生をやり直さうとしてかゝつた。ボールが外れたといふことでも其叙し方によつて獨りボールが外れたといふことのみでなく、機微の消息を傳へ得るものと思ふ。いづれも自然主義の影響であるといふ見方が出來ぬこともないでせう、併しそれは自然主義に重きを置いた考でせうね。

自然主義は一時大分文壇を風靡したですからね。碧梧桐などは其影響を受けたかもしれませんが。碧梧桐などはよく若い者のいふことに耳を傾ける方、どちらかといへば若い者の言に驚かされ過ぎると思はるゝ方ですからね。

併し私等其内部に居つて自分で實行して來たものからいふと、そんな風に自然主義の影響と

いふやうなものはないしてあるとは思ひませんがね。俳句といふものゝ性質からいふと自然主義的の傾向は已に自然主義以前からあつたと思ふ。「俳人はものをすつば抜くからいかん」といふことは明治二十八年頃に愚庵が言つたことがある。乙に氣取つて嘯月壇といつた、愚庵十二勝の一つである其嘯月壇なるものに行つて見ると、何の事だ其はたゞの物干臺ではないか。愚庵十二勝に唱和した多くの其時分の漢詩人や歌人はさもく尤もらしく月に嘯く壇として讚美してゐる。俳句ではそんな餘所行き體裁のいゝことを言つてゐるわけに行かんから「ふんどしを乾す物干の月見かな」と正直なことを言つた。さうすると愚庵は御機嫌が悪く「俳人はすつば抜くからいかん」と言つた。此俳人の素破抜くといふことは赤裸々なる人生を見ようとする自然主義に共通した性質である。自然主義の日本に傳はる以前から此傾向は俳人にはあつた。其最もいゝ例は一茶などに見ることが出来る。殊に性慾描叙が自然主義の特徴の如くいはれてゐるが、一茶の七番日記などは其先蹤を爲してゐるといつてよいではないか。醜惡なるものを描くといふことは蕪村などにもある。描寫の手法からいつて克明に自然の描寫をするといふことは俳句の方が遙に自然主義文學に先じてゐる。そんな俳句の性質をも考慮に入れて俳



句の歴史を考へないと本當のことは判らないと思ふ。

月舟は主觀的の句を作つてゐましてね、客觀寫生を研究しなければいかんと言つたところがそれで醜然と悟つたのか「寫生は俳句の大道なり」といふやうなことを言ひはじめたんです。

(昭和十年六月)

### 不易の方に重きを置く

兎に角俳句は古典的のもので、其程敏感に時代の要求を容れるものでないと思ふ。近代的の影響を受ければ受ける程自滅に陥つて了ふ、俳句は近代的でないところに生命があるんです。

十七字と季題といふ鐵鎖に縛られてゐる以上さう自由なことは出来ない。其所が俳句の短所でもあれば長所でもある。

季題は殖えて行きます。併しそれは俳句の材料の一方に過ぎない。

近代生活の色がついてゆくこともいくらかはあります。併し俳句の本質に動搖はない。

材料と色彩位は違ふが大本は違はない。俳句は小説戯曲などと比べては舊を守る性質のものである。古典藝術の一つである。

古典が不適當なら傳統といつても差支ない。

其違つて來るといふことに重きを置くか、變らないといふことに重きを置くか、それが古來から問題になつてゐる。所謂不易流行の論がそれだ。芭蕉も双方に重きを置いた。併し晚年輕みと稱へるところの所謂流行に重きを置いた爲めに其句は俗化した。私はどちらかといへば俳句の本質即ち不易の方に重きを置く。今の若い人々の御氣に入らぬことは固より承知だ。

(昭和十年六月)

### 破綻はそこから來る

議論から見ると素ばらしいことを言つて居るやうだが作句を見ると如何はしいのが多い。

が、中には一寸面白いなと思ふものもある。議論から見るとまるで氷炭相容れないやうな感



じがするが、其句を見るとかなりなものがあることがある。  
自分のものを打ち立てやうとすると必ず人のものをけなすやうになる。學究的態度で無くて政治的色彩を帯びて来る。前にも言つたやうに破綻は多くそこから来る。

(昭和十年六月)

## 滿 洲

この間ハルビンの安藤たいじ君が来て話して居りました。ハルビン等でも二、三十人集る會合は屢々催されて居るさうですが、これといふ指導者が無いので困つて居るといふ話でした。滿洲に居る邦人の數は私が嘗て行つた時分に較べて見れば餘程増加して居るので従つて俳句を作る人の數も殖えたらうと思はれるのであるが、要するに各地に指導者が無いといふ事が一番不便を感じて居ることであらうと思ひます。「平原」の諸君が奮發して何とか方法を講じたら宜からうと思ひます。ハルビンのロシヤ情緒はいくらか減退したといふ話も聞きますが、併し

その情趣も面白いし、滿洲人の生活にも興味があるし、滿洲一帯の落寞たる荒野の趣も愉快だし、もう一度遊びに行つて見度いとも考へて居ますが、何分多忙の爲に其暇を見出し兼ねて居ます。

滿洲では只その季題になるものが少ないですから一寸俳句は出来憎いですね。俳句を作らうと思へば出来ないこともなからうが、この前行つたときは俳句よりも文章を作る爲でしたからね。

私の行つた時分には其頃の支那人即ち今の滿洲人が最も威張つておりましたよ。赤系露人も威張つてゐた。ハルビンには日本の勢力が微弱で日本人は小さくなつてゐた。白系露人はその間に介在してみじめな状態でした。その白系露人は變らないと思ふがいくらか安定を得てやしな

いかしら。  
尤も白系露人なるものは私の行つた時分に既に氣魄がなかつたですね。赤系露人に對しても意氣銷沈して、只支那人の媚を買ふといふ風になつて居りました。それも止むを得ない運命であつたでせうが、近頃は愈々甚しくなつて行つたかも知れませぬ。



支那人は大陸的なところがありますね。

満洲は季節になるものが少ないんだから作りにくい。作らうと思へば相當に作れることは作れようが、併し俳句はもともと日本本土のものだ。

朝鮮も平壤のあたりから大陸的ですからね。

兎角内地の眞似をしたがるですね。ペーチカの傍で菊を作るのに骨を折る。強ひて菊なんか作らなくなつてもいゝものを骨を折つてしよぼくした菊を作る。儒城温泉へ行つたが其温泉の庭をつくるのに、榆か柳の木でも植ゑればいゝものを勢の無い松の木を苦心して植ゑてをるのを見ました。居住民の哀れがそこにあるんだけども其土地相當の草木を育てることをしないで無理に内地の眞似をするのは見つともないと思ひました、其事は俳句についてもいへます。

(昭和十年七年)

## 脚 本

五郎劇などくだらなくても面白い。ありやあくどい中に面白いところがある。

芝居といふものはお能のやうなものではないでせうね、民衆が相手ですからして。併し低級な中に藝術的な高尚なものが出来さうなものに思ひますがね。

一體脚本は作意が確かでなくちや駄目だ。

役者をよく知つてゐなければいかん。

(昭和十年七月)

## 雑詠は道場

雑詠を厳選するなら十分の一にでも百分の一にでもしますがね。之を十分の一か百分の一かにしたところでどういふ影響を俳句界に及ぼすか。ホトトギスの雑詠の句は厳選されてよくなつたとかいふ潔癖家の評判を贏ち得る位のこと、實質的にはたいした利益はあるまいと思ふ。否俳句界に存在してゐる一から十迄の階級の人に其々希望を持たせて各々其向ふところに



進ませるといふ兼々の私の方針からいつたら不具なものになつてしまふ恐れがある。俳句界は人々の考へてゐるやうにさう狭いものではないのである。秋櫻子調ばかりで無ければならぬ、誓子調ばかりで無ければならぬといふやうなそんな狭いものではないのである。秋櫻子調も結構、誓子調も結構、又素十調も結構、泊月調も結構、青菼調、茅舎調、たかし調、風生調、青邨調、立子調、汀女調其々結構なのである。又程度の高いものもあつてよく、程度の低いものもあつてよい。程度の低いものといつても正しい道を歩んで行く／＼は上達すべき性質のものに結構である。又新しいものも古いものもあつてよい。新しいものといつても唯新しいが爲に採るのでは無い、新しくして而も趣味あるもの。古いものといふても唯古いものだから採るといふのでは無い、古い道を歩んでは居るが、併し一點どこか取るべきところのあるもの。斯の如きものは凡てホトトギスの雑詠のうちに抱容してをる。いはゞホトトギスの雑詠は俳句界の小天地である。社會といふものは先頭に立つてゐる人もあれば其背後にあつて質實に働いてゐる人もある。先頭に立つてをるから必しも偉いといふわけでもない。又其先頭に立つてゐる人は少數の人間であつて、多くの人は其背後に在る。俳句界も亦其の如く先頭に立つ人は少數で

あつて、多數は背後に居る。其先頭に立つてをる人も其背後に在る人も皆最善の力を盡しそれ相當に秀でたる句を示してをるところのものがホトトギスの雑詠である。

雑詠を展覽會と見る勿れ、修行の道場と見よと私がいふのは此所のことであつて、これを嚴選することはホトトギスの雑詠の評判をよくすることにはならうが、それでは多數の人の修行道場とする私の素志に背く。従來ホトトギスの道場から幾多の俳人が輩出した。又現に幾多の俳人がこゝを自分達の道場としてゐる。斯くして成立つてゐるホトトギスの大道場を——敢て大道場といふ、それは他の人々の小道場に比べていふのである——今俄かに狭くする必要もあるまいと思ふ。斯んなことを真面目にお話するが、ホトトギスの悪口をいふ外の雑誌の選などを見ると斯んなことを真面目にいふのが馬鹿らしくなつて来る。口では立派なことを言つてゐて實際を見ると箸にも棒にもかゝらぬやうな選をしてゐる。

併し雑誌を編輯する上から雑詠のみで頁數を取ることは許さないので困つてをる。七月號などは八十頁を雑詠に取られたので、他のものが載らないので少々困つた。



### 俳話のレコード

レコードに俳話を吹き込みましてね、二枚で四面になつてゐる。四面で十二分です。

講義みたいになつてはつまらぬと思ひましてね、今の俳壇の實際を背景にして述べましたが。

聲で傳へることが雑誌などで読むより親しみがあるかもしれません。

たけしがね、此間どこかで講演をするときに叔父さんのレコードをかけようと言つてレコードをかけて後で講釋したさうです。

(昭和十年八月)

### 都會美

他の人は知らないが、自分は都會美といふものを特別に考へたことはない、都會であらうが田舎であらうが問題でなく、只自分の實際に見て感じたことを句にするばかりである。都會でも勿論俳句の材料になる。詰り季題のあるところには俳句があるわけで都會であつても季題があるから俳句は生れる、これは當然なことなのだ。唯、この頃の若い人に、都會の俳句を作らねばいけないとかいふ人があるがそんなことは第二義の議論である。

都會に生活するものは都會の季感を詠はなきや嘘だと感ずる人は都會を詠へばいゝ。又田舎に居る人は田園を詠へばいゝ。我々の如きものは隨時隨所に、都會であらうが田園であらうが見たもの感じたものを詠ふのである。又都會に住んでゐる人は田園に憧れを持ち田園に住まつてゐる人は都會に憧れを持つといふこともある。之も亦生活に即するものと言へないことかない。何かに今迄の句は田園の句であつたがこれからの句は都會の句でなくちやいけないとか



いつておましたね。そんなことをいふのは第二義に墮してゐる、俳句といふものは決してそんな狭い窮屈なものではない、そんなことに頓著なく、各々好むところ長ずるところに進むがよ

さ。  
都會となると季題から言へばどうしても不自由だ。俳句となると自然々々季題に豊富な田園に傾く傾向がある。武蔵野探勝といふものは武蔵野の田園の探勝が目的であつたがやつてゐるうちに都會の方面にも足を踏み入れてゐる。が、實際の成績はどうかといふと矢張り都會よりも田園の方が自由である。豁達である。勿論都會の俳句にも優れたものもある。

今の若い人の作るものを見ると、俳句として之を見る場合、不熟、幼稚、生硬、憐むべきものが多い。

結局花鳥諷詠を繰り返さねばならぬことになるが、比較的話であるが都會は田園ほど花鳥諷詠には適さない、都會といふものは天然の季題よりも人間生活が目立つてをる、新聞の三面記事、小説、戯曲の材料が充滿してをる。都會美を俳句にしようとする如きは其難きを爲すところに快味があるのだ。其が本領だと解するととんだ間違ひだ。

都會美を詠ふに何を苦しんで花鳥諷詠詩に倚らうとするのか、季節の拘束のない詩を作る方がい。

團扇とか扇とかは都會に多い、さういふものゝ都會美は昔からある。が所謂若い人は其等に満足しない。もつと近代的な器械とか、映畫とか、カフェーとかいふものを描かねば不満足なのだ。が、描いた處で立派な俳句にならねば無駄だ。立派な俳句は其等のものと季のものがびつたり一つのものとなつた時だ。さういふ場合は極めて少ない。

都會美と一口にいへば其は人間の美である。其人間の美を詠はうとする事も男子の仕事としてやり甲斐がある、それはやるがい。が、何を苦しんで其を俳句で遣らうといふのか。其は俳句といふものに或意味で未練がある爲か、私は其等の人の如何にも志が小さいかといふことを憐れまずにはゐられない。それ許りではない、其は必ず失敗に終ることを氣の毒に思ふ。

私自身はどちらかといへば都會美は好きな方で決して諸君の後へにあるものとは思はない。けれども都會美を詠ふのに俳句を以てするといふ主張、ことにこれからの俳句は都會美を詠はねば駄目だといふやうな豫言者めいた、寧ろ政治家めいた言説には不賛成である。



俳句に都會美といふと新しいやうな氣持がするからいふので、大した深い意味はない。唯新しいものを喜ぶ青年に媚びるといふ位のものだ。

兎に角、いゝ俳句で無ければ駄目だ。俳句で無いやうな幼稚なものを作つて、之で都會美を詠つたものだといふのでは問題にならぬ。

(昭和十年八月)

## 表 現

藝術の表現といふことについては私が曾て「藝術は技巧なり」と言つたことがある。如何に微細なものであつてもそれを現す技巧が立派ならば立派な作品になる、殊に僅か十七字の俳句の如きものは表現一つである。長いものならば少々表現がまづくても成立たないことはないが俳句の如き十七字の短いものでは表現がうまくなかつたなら成り立たないと言つていゝ。梅に鶯でも表現法が新しければ其でいゝのだ。——其表現といふのも矢張り作者の頭の問題ではあ

るが、——その表現が雜詠を讀む時分の一番主な標準になる。表現のまづい俳句は如何に立派な材料のものであつても採ることは出来ない。表現の立派なものなら平凡陳腐のそしりが起りさうなものであつても俳句になつてゐるとして之を採る傾がある。藝術は技巧なりといつてもいゝが、又藝術は表現なりと言つてもいゝと思ふ。殊に俳句の表現は最も大切で、表現をおろそかにしたら俳句はない。その表現といふことは駈出しの俳人の理解することの出来ないことで所謂年期を入れたものゝ初めて解するところだらうと思ふ。極端に言へば失禮だが、諸君にしても、より多く經驗のある私から言へば表現がまだ分つてゐないところがあるかと思ふ。それは諸君の句會の選などを見る時に感ずることである。要するに雜詠の選は表現に最も重きを置いて居る。

何故にこの句を採らないかといふ人があるが、それは言はんと欲するところは判つてゐるが、表現が出来てゐないからとらないのだと答へる場合が多い。

もとより内容と表現とは一つのもので元來二つに分けていふのは無理であるが唯便宜の爲に二つに分けてお話することである。



若い人は議論を組立てることのみ興味を持ち議論ばかりしてゐるが、句作をして経験を積んでからよく考へて見るといふ。私の若い人といふのは、私より若い人といふ意味である。

(昭和十年八月)

### 明月前川に満つ

自由律も近頃は少なくとも季題に未練を持つて來てゐるやうですね。

外國人は日本人のやうに自然を詠んで満足してゐることは出來ないでせうよ。

支那では「君が舊府に歸るを送れば明月前川に満つ」だけではなく「主人相識らず偶座林泉の爲なり」がくつゝいてゐる、こゝが違ふところだ。日本人は唯「明月前川に満つ」だけで満足してゐる。

(昭和十年八月)

### ブラジルの新聞

念腹君から、五月の末のブラジルのサンパウロ市の新聞「聖州新報」と、六月末の「伯刺西爾時報」を五六枚送つて來たのが今日(八月十七日)著いた。

それに日本經濟使節として行つた關圭草氏のことやら、念腹と會見のことやらが出て居つて興味が有つた。

日本人が二十萬人居るさうですよ。

市毛總領事も俳人らしいです。卒先して俳句會をやつて居ます。

圭草さんの行つた處から念腹君の居る處へは二日かゝらなくては行けないさうです。

(昭和十年八月)



俳句といふものは、もと日本の本土から生れた文藝であるのだから、歳時記といふものは日本の本土の氣候を基準として出来て居るものである。だから北海道とか九州とかいふ稍々邊鄙な處になるといくらか本土を基準とした歳時記では不便を感じるといふ事は今迄でもたび々聞いて居つた事である。併し、北海道の梅が櫻と一緒に咲くといふことを句にすれば却て其處に面白い味があるとも考へる。矢張り北海道に住まつて居る方の人々も、内地の氣候によつて編まれた歳時記に據るといふ事は、俳句を統一する上に於て必要であると考へる。尠くとも北海道邊りに住まつて居る人は、内地の歳時記に據るべきであると説いて來たのであつた。併しこれが北滿洲とか臺灣とかいふ處になるとその不便が多くなつて來て、季節を内地の歳時記通りに考へることが出来ない、といふ事が惱みの種となつて來たのである。それが赤道以南のブラジル邊りになると、氣候が如何に變化してゐるか想像の外にあると思つて居つたのであつ

た。今ブラジルの新聞を見ると六月が秋である。蟲とか、秋日とか、月とか、蘭の花とか、秋の山とか、肌寒とか、蜜柑とか、鶉とかいふ様なものが詠まれて居る。七月十日締切の題が冬の蝶であり、八月十日締切の題が枯芝であるとかいふ處からおよそ日本とは反對の氣候になつてゐるやうだ。ブラジルはブラジルの十二月月に割當てた歳時記を新たに作ればいゝわけである。が、取敢へず日本の歳時記、例へば私が編んだ三省堂の歳時記、春が二月、三月、四月となつて居るのを八、九、十月に改めればよいわけであるかと思ふ。さういふ風に月さへ改めれば大體日本の歳時記が適用出来るかも知れない。

尙ほ進んでいへば俳句といふものは、時候の變化によつて起る現象を詠ふ文學であるから、春夏秋冬の區別は必ずしも重きを爲さない。只、時候の變化其物が重要なものである。時候の變化に依つて起る現象を捉まへるといふ事が俳句の使命である。だから、例へば臺灣などでは凡ての木が常磐木と同じく落葉してをると同時に嫩芽を吹くといふ事を聞いて居る。さういふ現象を見たならば、矢張り、木が落葉して嫩芽を吹く、といふことを詠へばよいわけなのである。それを冬に入れるか、夏に置くかといふことは問題ではないのである。又、ブラジル邊で



は春夏秋冬の觀念の混亂があつたところで、その四時の移り變りの現象を詠ふといふことに變りがなくば、俳句の使命は全いと云つてよいのである。さう考へて來ると、春夏秋冬といふことは重要な問題ではなくなつて、只、氣候の移り變りの現象を詠へば差支無いといふことになつて來る。春であらうが、夏であらうが、秋であらうが、冬であらうがかまはない。唯、地球の回轉によつて起つて來る變化と現象を詠へばそれでいゝといふ事になる。いかなる地帯にあらうとも移り變りの現象といふことには變りは無い。

若し、俳句が世界化して來て地球到る處で俳句を盛んに作るといふことを空想して見て、春夏秋冬といふ感じが稀薄になつて遂にそれを撤廢するといふことが起るといふ時があると假定すれば、尙ほ時候の移り變りの現象を詠ふものとして俳句が存在して居ると假定すれば、さういふやうな國際歲時記が編まれる時が來るかも知れぬといふことは考へられるのである。

一應は考が其所迄行くのであるが、又翻つて考へると、矢張り俳句は日本で興つた文藝である。春夏秋冬とは日本の本土に起る時候の移り變りを最も適切な、最も美しい、最も微妙な言葉で現した區別である。俳句はその美しい微妙な春夏秋冬の四時を詠ふ文藝として、特に日本

に發達した文藝である。考へが其事に戻ると、世界の各處に派生する俳句といふものも、矢張り日本を標準として、日本を宗として、日本の春夏秋冬に準據して初めて俳句といふものが一つの全い體系を爲して發達して行くものであるといふやうな考へに立戻るのである。

外の文學になれば、小説とか詩とかになれば何處へ行つても通用する、風俗が異つても通用する。俳句となると季題が土臺になるからさうはいかない。之が俳句の最も弱點であるが同時に長所である。融通が利かないが同時に強い存在價值はある。日本に於て初めて發生し鑑賞することの出来る文藝であつて、慈しい外國にないといふことは力強い存在であると思ふ。

アメリカ人のプロバン・一羽といふ人は日本語で書いて雜詠に投句して來ますが、讀んで見て向ふの景色が現れてゐる句は面白い。私はアメリカを知りませんがね、想像するアメリカが現れてゐるから面白い。



## 俳句の映畫化

俳句の映畫化といふことはしてもいいと思ふですがね。只いゝ材料を選んでいゝ映畫を見せるのなら差支ないと思ふ。

俳句を映畫にしたところでいゝ映畫が出来るかどうか。

(昭和十年八月)

## 俳句の講演や放送

これまでいゝ俳句の講演や放送を頼まれてすることがあるが困るですよ。既に俳句を作つてをる人もあれば全くはじめての人もある。どちらに適するやうな話をするか、いつでもそれに困るです。けれども大概もうあらまは知つてをるものとして講演をするのです。はじめての

人は失望するでせう。

一月位續けて放送するようだったらいくらか人に俳句とはどんなものかといふこと位は判らすことが出来るかもしれんと思ひますね。

(昭和十年八月)

## 子規寸話

子規は自分の俳句をおろそかにしなかつた。金もちは一錢でも無駄にしないと云つてね、どんな句でも捨てないで書きとめてゐましたよ。

子規は漱石の書いた英文を読んで、英語の力は勿論漱石の方がずっと上なのですが、その英文に英語でベリー・グッドと評を書いたと、漱石は苦笑してゐましたがね。

子規は幼い時分から畫心はあつたやうですが晩年になつて畫き出した。子規は何でも器用だつたが器用なことはやめて了つて寫生でなくちやいけないと言つて畫も寫生をやつたもんで



す。兎に角偉かった。年齢の相違もあつたが、皆頭があがらなかつた。

(昭和十年八月)

### 新作脚本「髪を結ぶ一茶」

この春であつたか、吉右衛門氏が一寸發行所に来て、一茶を舞臺にのぼせて見度いと考へて居るのだが、誰かお仲間の方にも一茶の脚本を書いて見て下さることは出来ませうか、といふ話であつた。期限は何時迄ですかといふと、別に急ぎはしませんですが今年一つばいに出來れば結構です、とのことであつた。私は、書く人があるかどうか分りませんが、山會といふ文章會がありますからその席上で皆に相談して見ませう、と云つておいた。それから山會の席上でそのことを話すと、皆笑つて居る許りで誰も著手して見ようといふ者は無かつた。其後も亦一二度聞いて見たが誰もすゝんで遣つて見ようといふものはなかつた。そこで私は、若しやるのなら自分で遣つて見ねば仕方が無いと考へて高閣に束ねてあつた「七番日記」や「おらが春」

等を取出して發行所のテーブルの上に置いて、ちよつと間の有る時にはそれを取上げて讀んで見たりした。又嘗て私の俳句を其巻頭に掲げたので一本をくれた藤本實也君の「一茶の研究」といふ本があることを思ひ出して書架を捜し出してそれにも亦目を通して見た。が、一茶のどの部分を芝居にしていゝのか更に手懸りが無かつた。暫の間は其等の書物に手を觸れることすらしなくなつて居た。其後吉右衛門氏が發行所に見えらることも屢々であつたが、談が其一茶の脚本に觸れることもなく過ぎた。

この夏であつた。有志と元箱根に吟行して其處の宿に一泊した時であつた。もう寝ようと寝巻に著換へて蚊帳の中に這入つた時に、修善寺からお電話ですと女中がいつて來たので電話口に出て見ると、それは豫て知合ひの修善寺の新井の主婦からであつた。吉右衛門さんがこちらに來てゐらつしやるのですが、あなたも其處迄いらつして居るのならばお歸りに足を延してちよつとこちらへお寄り下さいませんか、との事であつた。新井といへば主人公が自慢の天平風呂なるものが出来上つてからまだ一度も行かないのである。此間立子が行つた時分に、お父さんが天平風呂を見に來て下さらんといふことは大變不平だ、といふやうな事を話して居た、と



いふことであつた。私は電話で明日は一應鎌倉に歸らなければならぬ用事があるので、それでは改めて出掛けることにしようが、吉右衛門氏は何日迄居られるのか、と聞いた。吉右衛門氏が替つて電話口に出て何日迄でも待つて居るとのことであつたので、それならば明後日改めて出掛けようといふことに約束した。

翌々日修善寺に向いて天平風呂にも這入り吉右衛門氏にも面會した。新井の主人も見えて鼎坐してから話が一茶のことになつた。私は、一向想が定まらないのだが、只これ／＼の事が頭にあるのだと云つて二、三ヶ條話して見た。それは大變面白いから是非書いて呉れぬか、とのことであつた。さうして八月、九月といふ二ヶ月は芝居も休みのつもりであるから其間に充分稽古を積んで十月の舞臺に出して見ようかと思ふとの話であつた。さういふ話になると大分切迫したことになるので今迄の如くのおんべんだらりともして居られないと考へて、それでは大體の筋だけでも書いて見ることにしようといつて私は歸つて來た。

私はもう殆ど二十年にもなるが原稿を書く場合に自らペンを執つて書くといふことはしないで、口授して筆記してもらふ習慣になつてゐる。そこでこの脚本も誰かに筆記して貰はなければ

ばならぬが、此頃常に私の原稿を筆記して居る東子房は生憎休暇を取つて旅行に出て居る。そこで今度日本評論社から頼まれた「俳句讀本」の原稿の整理を頼んであつた井出原太郎に、俳句讀本の方は暫く措いて鎌倉に來て貰つて、四五日の間鎌倉に閉ぢ籠つて筆記して貰ふことにした。忘れもしない今年の最も暑い日であつた四五日を全部其方に費した。

それから大磯の吉右衛門氏の許に行つて、安田靱彦氏も見えて、大體いゝといふことになつて先づ／＼重荷を卸した氣持で歸つて來た。其翌日であつたか吉右衛門氏が鎌倉の宅まで見えて、二三ヶ所註文が有つたので、又それを直すのに一兩日かゝつて漸く出来上つたのであつたが、吉右衛門氏は俄に九月の興行に地方に出なければならなくなり、稽古の隙がないので、松竹の遠藤爲春氏とも相談の上、十一月に廻すことになつたので、其後ゆつくりと校訂し、柏原地方の田舎言葉は折節上京中の富岡犀川君が柏原の近所戸隠の産である處から直して貰ひ、漸く定本として出来上つたのがこの脚本であります。

私は全くこの道に素人であつて初めは何處から手を付けていゝか見當が附かなかつたのでありましたが、まあやつて見るうちに、どうやら三幕四場の物に仕上げる事が出来たのであり



ます。

この脚本は、全體にユーモアが漂つてゐて、又、哀愁も底に潜んでゐると言つたやうな心持なのでありますが、其心持がうまく現れてゐるかどうかは疑問であります。

十一月に演ずるといふ話ではあつたが、松竹其他の都合でどういふ風になるかそれも判らないのであります。一茶は吉右衛門、その妻のきくは時藏、一茶の姪しまはもしほ、といふつもりで書いたのでありますが、そのもしほは最近東寶に這入つて吉右衛門一座から脱することになつたのは残念でした。

八十枚ばかり、芝居にして一時間四十分ばかりだらうといふことです。中幕としては少し長いかもしれん。

一茶が幕の前で幼い頃の仕科をする場面、あそこを吉右衛門氏に旨くやつてもらひ度いですね。

一茶がきくを發見したときの喜びも、變にかしくなつては駄目ですね。こゝも笑の中に涙のある心持が大切なのですが。

初幕の娘も相當のものを使つて貰ひたいね。

きくとしまの性格の違ふところが十分に書けなかつたが、そこは役者諸君の技倆に俟つたのですね。

一番初めに舞臺を半分仕切つて片方は仙六の住居、片方は一茶の住ひで、仙六の方はせりふを主とし、主として今迄の事件を説明し、片方は臺詞なしで仕科で見せる、と云ふ風にしたが。

序幕での一茶と又右衛門の會話、仙六の家での會話、あそこで説明しないと今迄の一茶が分からぬ。あれで見物人の一茶に對する概念が出来るかと思ふのですが。

富岡犀川君は一茶の村から四五里離れた戸隠の人ださうですが、其犀川君に直して貰つたのだが、あゝいふ風にあの地方ではいふことですがね。

此脚本で書き現したのは先づ半分であとは役者の技倆で、科で、味を出す必要がある。髪を結ふところ、幕場のところなどは一に吉右衛門氏に俟つのですね。

この芝居はどうでもやれると思ふ。唯をかしくやらうと思へばやれぬことは無い。又沈んだ



芝居にすれば出来ぬこともない。が、さう片よつてしまつては詰まらぬ。前にも言つたやうにユーモアもあればベロソスもあるといふ風に行き度い。

舞臺装置は安田さんです。

多分東劇にならうかといふことですが其もまだ分りません。

幕場の臺詞は随分長いが退屈せんでせうかしら。

第一此脚本の筋になる一貫した事件が無いので困つた。唯一家を兩分して住むといふことに重點を置いて、兩家の争を聊か誇大して僅に芝居にしたのです。

はじめは單に「一茶」とする積りであつたが其では一茶に対する責任が重いので、「髪を結ふ一茶」と限つたわけです。

一茶の家といふものは可なり大きな家であつたらしいですよ、實際はさう困るといふ風でもなかつたらしい。

幕場の獨り臺詞なんか、能狂言の型なんか取るといふと思ふ。

幕場の科は事實かどうかしらんが、併し記録にはあるんです。

柏原はかしいやばらといふのださうです。

これを書いたのも吉右衛門氏の依頼を果したといふばかりだ。

(昭和十年十月)

### 自分の道を進むこと

皆さんの句に別に變つた傾向はない、めい／＼自分の進むべき道を進んでゐらつしやるといふことは間違ひない。今の人は過去を振り返つて、立派な人が一時に輩出したものゝ如く考へるけれどもそれは誤りであつて、新しい人はぼつ／＼と平常の習練を積んで自然々々に出て來る。現在の状態に於ても、習練をお互に積みつゝあつて、新しい萌芽は常にきざしつゝある。今の俳句界の状態はこのまゝ續けて行つて矢張り絶間ない進歩を踏みつゝあるものと考へる。著實に歩一歩自分自身の道をたしかな歩みで進めばよい。他人の模倣をしたり、これではいかん／＼と焦せるといふことは害多くして利益は少ない。只落ち著いて自分を見はぐらないやう



にして行くことが一番だ。諸君の進んで行かれる道は最も希望の多いものであることを認めて居ることが大事だらうと思ひます。

(昭和十年十月)

### 俳句でなければ言へないもの

諸君は大志がない。もつと他の創作界に踏み出して自由な手腕をふるつて見る気はないか。其があれば、俳句をいちくりまはして變なものにするやうなことはせぬだらうと思ふ。たゞ俳句といふ小さい家にもつて、そこでのみ仕事をせうとするから昏迷に陥るのだ。私は文藝に對しては進歩的の考へを持つてゐる積りだが、俳句には多年携はつてゐるので、諸君程いちぐりまはす氣はない。それは俳句に對して忠實であるからだ。

俳句は小さいから名を成し易いかもしれないが、それだから俳句界を去り得ないといふのは卑怯だ。堂々と俳句の年期を入れてから、詩壇に打つて出るにしても、小説を書くにしても、

詩では少くとも言葉の緊密な詩が作れるだらうし、小説を作つても普通のものとは異つたものが出来よう。

俳句といふものは、俳句でなければ言へないことがある、そこが神髓である。その神髓を見極めやうと志す人は少ないと思ふ。

早晚諸君の眼覚める時が来るであらう。本來の俳句といふものに氣が付く時が来るであらう。

傳統を受繼いでやつてゐる、しかも古人のやつたことよりも進んだことをやつて居る。傳統を繼いでやつては居るが、新しい事をやつてゐるつもりだ。

花鳥諷詠といふことは我國の文壇に最も貴い使命を抱いて立つて行くものであると信じてゐる。

或る立場から見て俳句が一番文壇で先頭に立つて居るとも見ることが出来る。

俳句を作る人は自ら賤しく考へる必要はない、確かに他の文藝よりも進んだ力を持つて居る。

(昭和十年十月)



### 入門は易く上堂は難し

ホトトギスの俳句を見て、何だか少しの無理がなく、見た物の天真に觸れてゐる様で非常に心持がよかつたので自分もやつて見たくなつたといふ人がある、といふ話でありましたね。さういふ風の考をもつて俳句に入らうとする人は大變幸せな人であつて又私達が平常志して居るところを最もよく諒解して居るところの人であると思ふ。さういふ考で俳句に入るとするところ或る點までは達することが出来るであらう。然し或る點以上に進むことになるとなかくむつかしいといふことを考へて置かないと失望する。入門は易く上堂は難しといふのは殊に俳句に著しいと考へます。

それを説明するのは甚だ困難であります、矢張り見たまゝを敍するといふ點から這入つて行つてだん／＼作者の深い感じを寫すといふところまで行く、敍されてゐるところは極く簡単な一些事であつてもその中には作者の大きな感じがある。作者の大きな感じといふのは反面か

らいへば物の生命を捉へるといふことになる。そこまで進めばもう縮めたものである。ところがそこまで進むことはなかくむつかしい。進んだところで其を認めてくれる人は稀である。それは一見したところでは只平坦な句であるやうに見えるから、その句を味ふ人の頭がその作者程の深さになつて居なければよく理解出来ない。さういふ點迄達するにはなかく努力がいる。どうしても出来無い、出来ない許りで無く、自分は骨を折つて作つてゐるのに其が採られずに、あんな平凡な句が採られると、句の善悪が判る頭が出来て無いことは棚に上げて、選者を怨み不平になり意氣が銷沈するといふ結果になつて来る。

(昭和十年十一月)

### 平凡でも大衆的でもない

兎角世間の人には私等仲間の句を見て平凡だといふ人が多いのであるが、それは見る人の頭が未だその句を解するまでの深さに至つてゐないから只平凡なやうに見えるのである。その人の



頭がその句を解し得るだけの深さになつて居ればその句の味ひを解することが出来るのである。猥りに平凡呼ばはりする人は自己の不明を曝露して居るものであるといつて差支ない。

又私等仲間の句を評して大衆的だといふ人があるがそれは違つて居る。大衆的といふのは結構が立派で刺戟が強く、文學的素養のないものでも直ちに興味を惹かれるといふやうなものだ。私等仲間の句即ち何の當て氣もなくなるべく主觀を内に／＼と志して、一見しては殆ど主觀のないものゝ如く見えるやうな地味な、然し乍ら主觀の働きがないのではない、それはさう見えるだけであつて、内に深く藏して居るといふさういふ句は所謂大衆的の句ではなくつて、志すところは實に少數のよくそれ等の句を解することが出来る頭の持主、さういふ人の鑑賞にのみ俟つところの句である。世間の人が大衆的々々々といつて私等仲間の句をけなさうとするのはお門違ひである。

(昭和十年十一月)

### 大衆化したといふこと

俳句を大衆化したのは私の力であるやうに世間の人はよくいふが、私は自ら顧みてさういふ大きな力が私にあつたものとは考へませぬ。又さういふ政治的の働は私には持合せなかつた。私は只一途に諸君が月竝の領域に這入らぬやうにと其事を注意すべく小主觀の敘述を排斥した。

月竝といふのは子規が俳句を始めた時分に非常な勢を以てをつたところの梅室、蒼虬あたりの句の類をいふのである。これは色々の點から排斥さるべきものであつたが、中にも小主觀を弄して季題をほんの道具とするといつたやうな類のものが多かつた。それ等の句を月竝といつて排斥したのであります。それ等の小主觀に捉はれることなく、先づ己を空しうして自然の風物を研究することを第一とせよ、といふことを教へたのであります。その結果として出来るところの句は初めは極めて平坦な句であります、漸を追うて段々と深きに達し高きに達するの



であります。而かもその形は初め入門當時に作った句と餘りに變らない形の句であります。だから平凡な句のみを推奨すると誤解して俳句を大衆化したものといつたものでありませうがそれは間違つて居ります。けばくしい主観が上ツつらに出て居るといふやうな句は大衆は感心し易いものであります。さういふ句をこそ大衆的といつてもいゝかもしれぬ。大衆の感心しにくい、少數の識者にのみ解されるころの句、それ等のことを目ざして進んで行つて居る私等仲間の句を大衆的な句と見るのはをかしいではありませんか。

俳句を西洋人に譯して其の面白味を傳へやうといふのは餘程むつかしく殆ど不可能の話ですが、其でも、其中で、一茶の句などは先づ早く理解し得る句でありまして次で芭蕉の句なども比較的易い句のやうに考へます。其はその主観がはつきりと上に出てゐる句が多いからであります。が近頃の私等仲間の俳句になると最も理解し難い句であるやうに考へます。之は獨り少數の我等仲間の人々のみ解釋し得るところのものであつて、多くの人は容易に趣味を解することが出来ないものと思ひます。大衆的といふ言葉は、いゝ意味にも悪い意味にも取れますが、いゝ意味から言うても悪い意味から言うても私にその力はありませぬ。只いつの世にあつ

ても俳句といふものは盛んになる性質のものでありまして其意味から私等仲間の句も盛んになつたといふことはいへます。私が俳句を大衆的に導く力があつた爲のものとは考へませぬ。

(昭和十年十一月)

### ホトトギスの繪

東京でホトトギスを出した二巻一號の表紙は下村爲山だつたね。その時分には中村不折、不折の先輩の淺井黙語、今の下村爲山とまあその三人が表紙畫裏畫を交る／＼描いてくれたです。殊に不折が洋行して歸つた時分に——いや淺井忠が先に洋行しましたね。淺井忠が洋行した時分に西洋からホトトギスの表紙を送つてくれました。それを大變珍しかつて載せたです。それから畫入の通信もくれたです。引續いて不折が洋行から歸つた時分に其作品も澤山あり、不折の買つて歸つた立派な畫もありました。それ等を一緒に石版にして巴里土産として臨時増刊を出したこともあります。それからその時代が過ぎてからホトトギスに畫を投じて來るやう